

☒煉獄さん☒になる方法

鮫の呼吸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

令和から、大正へ。

生まれ変わった私の、僕の立場は物語とは違っていた。

“煉獄さん”の立場に成り代わった人が、懸命に生きていく話。

pixivにも投稿しています。

書き溜めの投稿終了につき、次回更新は暫くお待ち下さい。

目次

柱合裁判と “煉獄さん”	1
煉獄家の “煉獄さん”	11
蝶屋敷の “煉獄さん”	20
宇髄天元と “煉獄さん”	31
かまぼこ隊と煉獄家道中の “煉獄さん”	40
研究書と “煉獄さん”	49
煉獄榎寿郎と “煉獄さん”	58
“煉獄さん” になりたかった頃	74
乗車する “煉獄さん”	83
夢を見る “煉獄さん”	94

竈門兄妹と “煉獄さん”	108
列車の鬼と “煉獄さん”	116

柱合裁判と 煉獄さん

赫灼の髪、額の痣のような傷跡、隊服の上に市松柄の羽織。

隠に背負われやってきた、鬼を庇い、匿っていたというその隊士を見て、「ああ、もう来たのか」と思った。

その物語を読んだのはもう随分昔だ。僕が生まれるより前で、私が死ぬより少し前だった。赤子の頃に自分の立場に困惑しながら懸命に思いだしたものの、あらずじ程度しか思いだすことはできなかつた。

鬼を庇つた隊士、と聞いた時点で思いだしても良さそうな物だったけれど、毎日必死ですっかり忘れてしまっていた。常日頃、思い起すのは「彼」のことばかりだったので、仕方がないという事にしよう。

彼が主人公であつたところで、僕のやることは変わらない。起こされた少年に胡蝶さんが声をかけたところで、口を開く。

「裁判の必要がなさそうなほど明確な隊律違反ですが……困りましたね、鬼を匿つた隊士への罰則というのは、例が無さ過ぎて罰則の規定さえありませんよ」

「ならば今決める他ないだろう。鬼諸共斬首でどうだ。俺が派手に頸を斬ってやろう」
「貴方ホントそればかりですね」

呆れる程に芯が通っている。本当に元忍なのだろうか。個性が強すぎる。

柱合会議に出たり柱が集まる度いつも思うが、柱は個性が強くなければいけないという決まりでもあるのか？癒しの甘露寺さんも、涙を流しながら数珠を鳴らす悲鳴嶼さんも、ぼんやり空を見ている時透君も、松の上からネチネチと嫌味を言う伊黒さんも、宇隨さんの言葉借りるなら『派手』だ。

胡蝶さんも見目麗しいしとやかな女性の様でいて、中々強かだし、富岡さんは寡黙すぎて感情がわからない。

因みにここにいない不死川さんは論外だ。個性が立つ云々の前に怖い。柱じやなかったら近寄ることさえ遠慮していた。人一倍鬼を嫌っている節がある不死川さんがここに来たら間違いなく場が荒れるだろう。

そうなると、結構な確率でこつちに流れ玉が来る。当たり散らされても怒りを露わにしないからと、暗黙の了解の様に宥め役を任せれがちなのだ。嫌だなあ、と思っっていると、少年の弁明が始まった。

「……俺の妹は鬼になりました。だけど人を喰ったことはないんです。今までも、これからは、人を傷つけることは絶対にしません」

希望的観測だな。そう思わざるを得ない。彼と、彼の妹は僕の知る物語で主役だったが、僕の現状からしても物語の流れは決して彼らを信じる根拠にはならない。

鬼は人を喰らう。そういうどうしようもない欲がある。親類が鬼になつたと信じられず庇おうとして、そのまま喰われかけた人も任務で見たことがある。その人は結局亡くなつてしまい、僕にいつその無力感を植え付けた。

例え今喰わなかつたところで、いつ欲に負けるかわからない。危険因子をそのまま捨て置いて、被害を受けてから処断するのでは遅すぎる。上に立つものとして、少年はさておき鬼の娘の頸は危機管理として斬って置きたいところはある。

だが、一つ懸念があるとすれば。

「あのお、でも疑問があるんですけど……。お館様が、この事を把握してないとは思えないです。勝手に処分しちやつていいんでしようか？」

「そう、それだ。甘露寺さんは良く気が付くね、ありがとう」

「いつ、いえ、そんな……。うふ」

照れる甘露寺さんの頭をぽんぽんと撫でる。この際伊黒さんの方には目を向けないのがコツだ。多分今怖い顔をしているだろう。一応兄貴分の特権として許容してほしい。

見下ろした、地に伏してこちらを見上げる少年の目もまた赫灼だ。羨ましいくらいに

鮮やかで、美しい。僕の欲しい色が、生命の力強さを持つて輝いている。

「い、妹は俺と一緒に戦えます！鬼殺隊として、人を守るために……」

「君の意見は今重要じゃない。静かに処断を待ちなさい。傷に響くよ」

「そんな……！」

「お館様のご意志に反するような事があつてはいけない。何か我々では至らないような深いお考えがあるやもしれません。鬼は隔離してある様ですし、一旦お館様のお越しを……」

「——その隔離された鬼つてえのはこいつかア？」

……待ちたかつたんだけどなあ。

鬼の気配がする箱を手に現れた不死川さんに、僕は思わず息を吐く。本当、血の気が多くて勝手な人だ。

柱、本当に個性濃い。

柱合会議は、やはり疲れる事ばかりだ。

不死川さんは裁判で流した血も何のそのという勢いで、普段通りの血の気の多さ。想定通りに元々仲が良くない、言葉足らずの富岡さんに突っかかって、いつも通りに僕が

緩衝剤代わりにされ、ついでに凄く罵られた。便乗して伊黒さんも嫌味言ってくるし、本当に散々だ。

時透君はお館様が話す時以外ぼうつとしてるし、悲鳴嶼さんはいつも悲劇的。胡蝶さんは腹の底を見せず、宇髄さんは本当に終始派手。

癒されるのは甘露寺さんだけだよ、本当。基本的に分かりやすく素直なもの。あの子は人の良いところを見つけるのが得意だから、いつだって人に好意的で、極端に人を嫌ったりする事が余りない。話しているとても心が安らぐんだよね。

まあ、一番ホツとするのはやっぱ家に帰った時なんだけど。早く用事を済ませて家に帰ろう。今日から柱合会議だと言う事は知らせてあるから、きっと弟が首を長くして待っているだろう。

「さて、確かこの部屋だな」

少女達に聞いてやってきた部屋の戸を開く。幾つか並んだ寝台にそれぞれ寝ている者がいて、その内此方を見たのは先程も見た色の瞳だった。

「おや、また会ったね」

「あーさっきの……」

「えっ、何誰?! 誰このべらぼうに強そうな音がする人!? 炭治郎の知り合い!」

「? 煩かったかな? ごめんね」

そんなに強く戸を開けたりした覚えはないけどな。首を傾げながら言うと、妙に服の袖が余った金髪の少年は「アツハイ」と言つて布団の中に縮こまっていた。

うん、怖がりなのかな。他の柱より威圧感はないつもりなんだけど。

「あの、何か……?」

「嗚呼、君の事じゃないんだよ。えつと……何という名前だったかな。獣の呼吸というのをを使う隊士に話を聞こうと思つて来たんだけど」

ここに居るかな、というと、目線が一か所に集まっていた。釣られてそちらを見て、思わずギョツとする。

えつ……猪じゃん……。顔が猪で体が人っぽい。どうしたの、血鬼術?と思つたけど、隠の人から聞いたところではこの少年(?)が向かったのは赫灼の少年達と同じ那田蜘蛛山だ。

じゃあこの顔は自前なのか……よく見たら目に光がないから被り物か何かなんだろうけど、不思議な子みたいだな。そろそろと近寄つて、軽く会釈する。

「はじめまして。君が獣の呼吸の子?」

「ソウダヨ」

「おや……もしかして喉を悪くしてる?」

「ウン……オレ、ヨワクツテ……」

何やら自信を喪失しているらしい。しかし、病衣の上からも分かる体つきは、彼がよく鍛えている事を示している。

彼等は直近の選抜で隊士になった新人だと聞いている。それで下弦の鬼がいる山で生き残ったのだから、卑下するほどの実力ではないはずだ。

「いいや、君は弱くないよ。癸の隊士が十二鬼月との戦いで生き残るのは稀な事だ。君が生き残れたのは、ひとえに君が良く鍛錬して来たからだよ」

「デモ……オレ、クビ、キレナカッター」

「今回斬れなくても、次には斬ろう。次が駄目でも、その次だ。決して諦めず生き延びさせれば、誰かがそれを継いでくれるし、自分にも次がある。勿論次までに努力はしなければならぬが、君はそれが出来る子だ」

そつと手を取って、掌を見る。無骨な少年の手だ。普通に剣術を修めた者とは少し違うが、その手にはマメの跡や細かな傷がある。

「硬くて良い手だ。戦う者の証だ。君の手は、これからもっと強くなる者の手だね」

「……ツヨク……」

「自分を信じなさい。そして励みなさい。今日の悔しさを糧に進むんだ。その為に、しっかりと休んで傷を治すんだよ」

良いね、と聞くと、被り物が小さく動いた。多分頷いたんだろう。そういう事にして

おく。

微笑んで、ちよつと迷つてから被り物を撫でた。あつこれ本物の猪頭だな。野生の物だと思ふ。毛並みが結構ごわつてゐる。

しかし、喉を痛めるとあつてはすぐの聴取はやめておいた方がいいだろう。患者に無理をさせては胡蝶さんに怒られてしまう。

「喉が良くなつた頃にもう一度来るよ。その時、君の呼吸の事を聞かせてくれるとありがたい。僕は呼吸の研究をしているんだ」

「呼吸の……研究？」

何故か反応を見せた少年を一度見やるが、取り敢えず名乗つておかなければなるまい。このままでは急に來て勵まして、呼吸の話を強請るただの怪人物だ。

「僕は煉獄千寿郎。」

——未熟者ながら、炎柱を名乗らせて頂いている」

「あら、煉獄さん。お怪我でもされました？」

「胡蝶さん。いえ、呼吸の件ですよ」

蝶屋敷を出るところで、胡蝶さんと会った。

一言言えば、納得して彼女は頷く。呼吸を研究するにあたって医療分野からの見解が欲しい事もある。その際に胡蝶さんには良く力添えを貰っていた。

「ああ、確か嘴平君が使う呼吸が独自の物でしたね」

「ええ。喉を痛めてるようなので、また治った頃に伺います」

「そうしてください。機能回復訓練を始める頃になったら鴉で連絡しますから」

「ありがとうございます」

和やかなやりとりで済んでよかった。胡蝶さんは時々微笑みながら滅茶苦茶に怒っている時があるが、今日のところは大丈夫だろう。いつだったか、時透君が自分の怪我の具合を忘れてさっさといなくなってしまった時に居合わせて、言外に迸る怒りが恐ろしくて仕方がなかった事をよく覚えてる。

表に出ない怒りほど怖い物はない。別に普段から人を刺激するような物言いをしてるつもりはないが、胡蝶さんに対しては特に気をつけるようにしている。

彼女の怒りは、僕にはどうしようも無い物だ。

「煉獄さんはめつきり怪我をする事が減りましたから、こちらで会うのは久しぶりですね」

「はは……まだまだ弱輩者ですが、何とか見られるようになって来ましたかね」

「うふふ、謙虚も過ぎると嫌味ですよ」

あ、ちよつと笑みが冷ややかになつた。いけない、どこか気に障つたらしい。

「それでは、もうお暇しますね。明日からもよろしくお願ひします」

「ええ、こちらこそよろしくお願ひします」

今のよろしくお願ひしますは、明日の会議の続きも適度に不死川さん達の緩衝剤になつてね、つて事だろうな。遠い目をしたような気持ちになりつつ、胡蝶さんと別れ蝶屋敷を出る。

さあ、後は帰るだけだ。気を取り直して、軽いお土産でも買って行こう。

煉獄家の “煉獄さん”

「ただいま帰りました」

玄関から声をかけると、奥から足音が響いてくる。

相変わらず元気そうだと、とほっこりしていると滑り込むような勢いで駆けてきて座し一礼した弟の笑顔が弾けた。

「おかえりなさいませ兄上!!」

「ただいま、杏寿郎。元気そうだね」

「はい!!兄上もご健勝そうで何よりです!!」

立派な声量もいつも通りだ。廊下を走るのは良く無いけれど、それだけ慕ってくれているという事。今日は叱らないでおこう……と言うのが、実は帰る度毎回なんだけど、どうにも叱れないでいる。

履き物を脱ぐのに座り、近づいた杏寿郎の頭を撫でる。いつもキョトンとしたように見開かれた眼を、嬉しそうに細めるのがとても愛らしい。

「さ、杏寿郎、これは土産だよ」

「わあ、おいも!!では兄上、兄上のお芋ご飯が食べられますか!?!」

「お前は本当にそれが好きだねえ。じゃあ急な任務がなければ明日にでもそうしよう。会議の後だから少し夕食が遅くなるけど、我慢できる？」

「できます!! できます!!」

食べる前から嬉しいのか、わっしょい! と声を上げてワラで括られたサツマイモを持ち上げる。芋と手料理で喜んでくれるのだから、可愛いものだ。

任務先などの特産を買って来てもいいのだが、結局芋を買って帰った時が杏寿郎が一番喜ぶ。令和の世だったら様々な種を食べ比べたりさせてやれたが、今は大正。食べ比べができるほど世の中にサツマイモの種類は出回っていない。

もし食べ比べさせてあげられたら、わっしょいわっしょい騒がしかっただろうなあ。まあでも、令和の世は物に満ちていたので、芋では満足してくれなかった可能性も無きにしてもあらず。

杏寿郎のわっしょいが聞けないかもしれないと思うと、とても寂しい。となると、やっぱり今で良かったなあと思う。

「おみよさんは厨かな？」

「はい!! 今煮物を教わっていました!! 見ているから迎えて来るよう言っていたのですね!!」

「そうか、じゃあすぐ戻らないとね。煮物、楽しみにしているから頑張って」

「はい!!」

「良い返事」

履き物を揃え、立ち上がる。僕が身を向けた方向に瞬時にムツと表情を曇らせる杏寿郎は、今日も自分の気持ちに正直だ。相変わらず、仲違いをしたままにいるらしい。

「……父上のところですか」

「ああ。挨拶を済ませたら私も厨に見に行くよ、先に行つててね」

「……」

プツクリ頬を膨らませて、けれど芋は大事に抱えて去つていく背中を微笑ましく見送る。拗ねてる所だつて可愛いんだから、うちの弟はすごい。

綺麗に磨き上げられた廊下を進む。おみよさんはいつも丁寧に掃除をしてくださつてるようだ。やはり給金をもう少し受け取つて欲しいが、いつも柔らかく遠慮されていた。

おみよさんは藤の家から週三、四来て頂いているお婆さんだ。僕の務めが鬼狩りである事もあり、一般の女中を雇う事はできない為である。正式な雇用の形を取つてはいるのだが、相場よりも良心的で、なんだか申し訳ない気持ちになる。

我が家はあまり良い職場環境では無いだろうに、おみよさんは文句も言わず働いている。家事が不得意で、掃除をすれば障子を破り、料理をすれば火力で消炭だった杏寿郎

にも、甲斐甲斐しく教えて下さる。

お陰で杏寿郎は米だけは一人で炊けるようになり、そこから少しずつ作れる品目を増やしている。ありがたい事だ、頭が上がらない。

それに彼女は、杏寿郎の世話ばかりか、父の抑止にもなってくれる。

「父上、千寿郎です。入ってよろしいですか?」

返事は無いが、いつもの事だ。中に入ると、いつもの様に万年床に転がって、こちらに背を向けている。襖を閉じてから正座し、畳に手を付いた。

「長く空けて申し訳ありません。お元氣でしたか?」

「……………」

寝た振りのつもりなのだろうか。父の寝相は良く、仰向けじゃなければ寝付けない事くらい知っているのだけれど。

幾つかこなした任務の話をし、時折問いかけるように声を掛けたが、少しも反応はない。罵倒さえあまり返ってこなくなった事が進歩なのか悪化なのかは、よくわからないままだ。

「柱合会議の為また暫く滞在致します。明日は杏寿郎が食べたがっている芋ご飯を炊くつもりなので、少し遅くはなりますが、良ければご一緒に夕食を取られませんか?」

「まだ、柱などやっているのか」

不意に、落ちた言葉は何度も言われた事だった。柱になってからは今のようになり、その前は「まだ刀を握っているのか」「まだ鬼殺隊などにいるのか」だった。かつて烈火の様だった言葉は、苛立ちを含みながらも熱量がない。

「はい。務めさせて頂いております」

「……才もない癖に、実力も伴わぬ座に何故しがみ付く。無様極まりない」

のそりと起き上がり、此方を睥睨する。気怠げだが顔色は悪くない。頼んだ通り、おみよさんが食事をさせてくれているのだろう。

若い頃父も度々訪れたという藤の家にいたおみよさんを、父は強く邪険にする事ができない。家族でない者が家に居ることにより、理性を呼び起こす事もできる。報告がない以上、最近は冷戦状態だが杏寿郎と目立った喧嘩をしている様子もない。

やはり判断としては間違っていないかった。会議の間におみよさんと彼女の家には、何かお礼をしなければ。

「僕のような愚昧でも、お館様は信頼して柱を任せて下さっています。その信が続く限り、この身が続く限りは頂いたお役目に添える様励むつもりです」

「くだらん。貴様ごときに何ができるといふんだ」

鼻で笑い、立ち上がった父はもう私を見ていない。

「まともに刃も染められぬ劍士に、果たせる役目などあるものか」

言い捨てて出て行く背を見送る。

投げつけられた石の様な言葉が、胸の内にかつりと音を立てた。

杏寿郎の手製の煮物は少し塩つけが強いものの美味しかった。父は結局その場には現れず、また酒を呑んでいたのだろう。

おみよさんが言う事には、僕達が食事をしている間に帰ってきたらしい。酒瓶を持っていたので、つまみとして煮物を出しておいたと話してくれた。後で部屋の前に行くとき空になった器が出てあり、こつそり笑ってしまった。いつもおみよさんが作る味とは違う事くらい、酔っていても分かっただろうに。

口を利かなくても、表向き罵っても、その内には昔確かにあった想いが残っている。それを感じて嬉しくなったが、杏寿郎は僕が持ってきた器を見て心底嫌そうに顔を顰めた。不和の根は深い。

(まあ、二人がこうなったのは僕のせいだけど)

自惚れではなく確実に、二人の仲違いの原因は僕だ。庭先で一人型稽古をしながら、

思い起こす。何度も繰り返した反復運動は、少々の考え事ではブレることはない。

母が床からあまり離れられなくなった頃から父は沈む事が増え、愛する人を失ってからは本格的に荒れた。刀を持つ事に意味を見出せなくなり、柱を辞して全てを放り出し酒に溺れる様になった。鍛錬し、鬼殺隊に入った僕を罵り、僕の才の無さをあげつらう様になったのもこの頃だ。

弟は昔から家族で一番僕に懐いていた。だからいつそう父のその態度を嫌った。感情を包み隠せない性格だった為に真つ向から父に反抗し、僕に宥められなければ収めることができなかつた。

選別を終えて這々の体で帰り着いた我が家が二人の喧嘩で廃屋のようになっていた時には、思わず玄関先でそのまま失神したものだ。あの時が一番被害が酷かつた。

余談だが、半分は杏寿郎の家事の結果だったのは起きた後に発覚した。白目を剥きたくなつた。

僕にしがみつiki泣き疲れて寝た杏寿郎を抱きつつ、最寄りの藤の家に駆け込んで相談し、その場でおみよさんと契約したのは今や懐かしい思い出である。

思えば冷戦に切り替わつたのはこの件がきっかけだった。少なくとも杏寿郎には、大分僕の卒倒が効いたらしい。父と顔を合わせることもさえ無くなり、関係する事には嫌悪感を露わにする様になつた。

(……失意に暮れているだけで、父上の奥底は変わっていらつしやらない。杏寿郎は鈍くは無いから、それに気づけばまた違うだろうが……)

それにはまだ、時間が掛かる。

「……、……ハア」

ブレた鋒に、一呼吸して刀を下ろす。その刃を見下ろして、胸に詰まった石ころがガリ、と音を立てた。

炎の呼吸を継いできた煉獄家の伝統に倣った、炎の揺らぎに似た乱れ刃。その刃は、かつて父や歴代の炎柱が振った様な、赫い色をしていない。

まるでこびりついた赤錆の様。

滲んだ朱色がまばらに浮き出た、僕の二本目の日輪刀。

「無様だな」

父上が仰るのは事実ばかりだ。分かっているから、棘で刺される様に傷つく事はないけれど、だからこそ容易に振り払えず胸の内に積もる。

最初の刀が折れ、新しく誂えたこの刀が今の様になり、染まった事に喜び、同時に落胆した。

鍛錬を積み、呼吸を研究し、何体も鬼を斬り……それでようやくと、辿り着いてこれなのか、と。

無能の謗りが、半端者に変わっただけ。

柱になる時にも、反対意見が少なくなかった。お館様のご厚意と、炎柱の座が空いていたからそこに就けただけだ。

実力がそれに伴っているかは、自分ではとんと分らない。

ただ確かなのは、必要な時間が、もう残っていないかもしれないと言う事だけ。

「……無限列車、か」

脳裏を過るのは、あの美しい赫だ。

掲げた刃に映した自分の顔は、とても運命を覆せる様には見えなかった。

蝶屋敷の “煉獄さん”

鍛錬はいつもしている。呼吸の研究も復習も欠かす事はない。ならば特別出来る事はなく、会議を終えたらいつも通りに鬼を狩るしかない。

この世界は物語に良く似ていて、同じ事が偶に起こる。それは或いは鬼を連れた隊士、或いは僕の父の墮落。違う事は本編自体をよく覚えていないので、僕の立場が本来は“彼”の物だったことくらいしかわからない。

物語と同じになると信じていると、僕は恐怖やら重責に押し潰されなければいけなくなる。だから今までと同じ様に、余り気にせず過ぎす事にした。

いつ出会うか分からない鬼に警戒し、頸を斬る為に研鑽し、その為の知識を探り、実践して身につける。それだけのことだ。これまでと何も変わるだけだ。

変わるとしたらほんの少し、残り時間への備えが加わるだけだ。

「猪君はいるかな？」

「あつ！炎柱の……！」

訓練室に当たりをつけて覗くと、案の定少女達に扱かれている所だった。わあ、懐か

しい。最近大怪我しないから受けてないけど、常連だったんだよな。

猪頭の少年は僕の声が聞こえていないかの様にうつ伏せになってピクリともしない。その傍で膝を抱えているのは金髪の少年で、猪君の代わりに反応したのはびしょ濡れの赫灼の少年だった。

「うん、煉獄です。ある程度治つたらしいから、呼吸の聴取をしようと思つてね。胡蝶さんの許可も得てあるから、休憩しながら話を聞かせてよ。いいかな？神崎さん」

「しのぶ様が許可されたなら私に意見を聞く必要はありません！私達は他の患者の様子を見て来ます！」

キビキビと答えた彼女が女の子達と栗花落さんを連れて出て行くのを見送ってから、三人に向けてお茶を乗せたお盆と風呂敷を軽く掲げてみせる。

「お見舞いに甘味屋でお団子を買つて来たよ。食べる？」

そう言えば現金な物で、こちらを見もしていなかった二人も合わせて顔を輝かせた。甘い物を前にした時の若い子の反応って、可愛いなあ。

「触觉の鋭さに合わせた呼吸か。成る程……新しい使い手を出すのは難しいかもしれないけど、面白い」

聴診器を懐にしまつて帳面に記入する。興味津々で見てきた猪君、もとい嘴平君には悪いが、これは結構高いので替えが利かないのだ。発注には胡蝶さんを頼るので、壊すと凄く静かな笑顔で怒られてしまう。

誤魔化す為に団子を差し出してから、所見を書き綴つていく。

「柔軟性は恋の呼吸にも通じているけど、音と肺の膨らみ方からすると、風の呼吸に近いものがあるね。基礎の呼吸を経由していないから派生とは言い難いし、日輪刀がどんな色を見せるかでも変わってくるけど……一旦は分類を風としておこう。方向性としても中々向いていそうだ」

「ごちやごちや意味わかんねえ事言つてんじゃねえ!!」

「君によくあつた強い戦い方だ、という事だよ」

「そんなことあ知つてらあ!!」

「よしよし、団子もう一本食べるかい?」

「よこせ!!」

僕が持ったままの串に齧り付いた嘴平伊之助君は団子だけ口の中にさらつて行き、キラキラした顔でもつちもつち!と咀嚼した。美少年どころか美少女の様に整った顔立ちに似つかわしくない豪快さだ。

それにしても随分綺麗な子だな。何で猪被つてるんだらう。猪に育てられたからつ

て事で良いのかな？理由は昔読んだはずだけど、ちつとも思い出せない。

それを見ながらポカんとした赫灼の少年と、そわそわとこちらを窺いながら団子を食べている金髪の少年に笑いかける。

「君達もありがとう。客観的な情報を聞けるといいうのは助かったよ。えつと……名前をいいかな」

「竈門炭治郎です！」

「あ、我妻善逸……です」

「竈門君に我妻君だね。君達は何の呼吸を使うの？」

「雷の呼吸、です。壺の型だけだけど……」

「俺は……水の呼吸ですけど、あの、煉獄さんは他の呼吸にも詳しいんですよ？」

けど、と来たか。”彼”の事を思い出す時にも竈門君に関して何か情報は出ていたと思うけど、やはり他と同じでほとんど覚えていない。何か別の呼吸も使っているのか？

派生と派生元の関係と違い、別の呼吸を使い分けるのは身体に負荷を掛ける。出来ても継戦が困難になるから、そうやって戦うのはほぼ不可能なはずだけど……。

考えつつも、淀みなく応える。聴取の時間かれることも少なくないから、答えはほぼ決まっているのだ。

「自分が全て出来る訳じゃないけど、呼吸は一通り調書を取っているよ。呼吸毎の特徴

を知っておくと、自分の呼吸で極めるべき点と言うのが見易くなる。補わなければならぬ点もね。お茶のおかわりは？」

「えっと、頂きます」

「よこせ!!」

「(柱に茶を注がせて平然としてやがる……とんでもねえ奴らだ……)」

「我妻君もどうぞ」

「ヒョツ!?!あ、は、ハイ……」

おずおずと差し出された湯呑みに急須を傾けながら言葉が続ける。

「例えば雷の呼吸は呼吸の力を脚に集中させ、神速の斬撃を繰り出す特徴から疾さはどの呼吸にも勝る。そうだね？」

「んぎゅツ!?!あ、ハイ、そ、そう、でございますかね……?ウエヒツ」

「専門の呼吸法で行うほど極められなくても、これを活かすことはできる。つまり、呼吸の力を脚に傾ければ疾く走れると言うことだ。応用すると、威力が必要な技を放つ瞬間に必要な筋肉に呼吸の力を傾ければ、本来の型より強力な技を出すことも出来るって事」

「そうなんですか!?!」

「理屈としてはね」

実現しようとするとその中にさまざまな過程が必要となる。

まず、人間は普段の動きで自分の筋肉の動きを全て把握している訳ではない。雷の呼吸も脚全体を強化している為、筋肉を選んでいく訳ではないのだ。

モノにするには、相当な鍛錬を要する。常に自分の筋肉を意識しながら動き、まずそれらがどう動き、どの動きの時に最も良く働くかを把握。その上で呼吸の力を傾ける割合を操作し、効果的に力を増幅させる強化法を身体で探る。

また、技を放つ為だけで無く、その反動に耐える為の動作にも意識を割かなければならない。筋肉を酷使し過ぎたり次の動作に繋げることが出来なければ意味も無いので、その匙加減も必要だ。

そしてそれらの判断、配分を瞬時に行えなければ意味がない。鬼はこちらの集中を待つてはくれない。そして想定通りの動きもしてくれない。自分の身体の動きだけでは無く、その判断と対応もしなければならぬのだから、筋力だけで無く脳も著しく働かせなければならず、その為にはそちらにも呼吸を傾けなければならぬのである。

現実的には恐ろしく難しい話だ。その発想は出来ていた僕も、理想的な使い方には程遠い。『始まりの呼吸』の使い手は当然の如くそれらを熟していたのかもしれないが、使い手もおらずその記録が殆ど残っていない以上、検証のしようがなかった。

「僕はあまり強くないからね。そうして学んでいく事で補っている」

「えっ……」

「それで、そう聞くって事は何か呼吸で聞きたいことがあるのかな？」

少し渴いた喉を温くなった自分の茶で潤しながら促す。竈門君は慌てて姿勢を正し、それを口にした。

「ヒの呼吸についてご存知ありませんか？」

「……詳しく聞こうか」

咽せるかと思った。

団子を食べた後は転がって寝だした嘴平君を他所に聞いたところ、竈門君の意図としては火の呼吸と言いたかったらしい。

しかし、ヒという響きを持つ呼吸は『始まりの呼吸』の他にはない。炎の呼吸も、混同を防ぐ為にそう呼ばれているくらいだ。

正式名称はヒノカミ神楽といい、代々厄祓いの為に年始に奉納する物として継いできたと言うが……。

「うーん……」

「何か、思い当たる事はないでしょうか」

ヒノカミか。随分意味深な名だ。『火の神』とも取れるし、日本の最高神と言われる

『日の神』とも聞ける。火は呼吸として名乗れない物であり、日とは誰も知る者が残っていない『始まりの呼吸』……日の呼吸に通じる。意味のない符号とは思えない。

血縁？いや、日の呼吸の家系で残された血は時透君だけだとはつきりしている。思えば時透君は元杣人で、炭焼きと同じ様に山奥で暮らす職業だ。当人が記憶喪失の為呼吸については分からないが、その点は少し竈門君と似通っているか？

「竈門君、君の額の痣は生まれつき？」

「え？これは……昔の火傷です。選別の時に受けた傷で今みたいな跡になつて」

「先祖は代々炭焼きかい？間違ひなく？例えば、時透などと言つた家名に聞き覚えは？」
「えつと、うちは家系図でもずつと炭焼きですし、時透？と言う家名は載つていなかったと思ひます」

「そうかあ……ふむ」

二者の繋がり方はさて置き、ヒノカミ神楽が日の呼吸に通じる物だというのは納得しやすい話だ。呼吸の関係者が人里を離れ暮らしていたとなると、隠していた、或いは隠れていたのかもしれない。

強力である事が分かつている日の呼吸が関係者諸共失伝しているというのは、明らかにおかしい。同時に、それだけ強力な物を鬼舞辻無惨が目障りに思わないはずがない。

もし失伝が鬼舞辻無惨の計略による物であり、それから隠し守る為に、そして目を欺

く為神楽に姿を変えて受け継がれて来ていたのだとしたら——。あり得ない話とは言えない。実際に彼は鬼舞辻無惨と遭遇し、狙われている恐れがある。

それにあくまで付随する一つの要素に過ぎないが……竈門君は、竈門炭治郎は主人公でもある。

僕は覚えていないが、そう言った隠し要素は主人公には付き物だ。下弦の鬼に対峙した際に偶々思い出し、用いた神楽の呼吸法が鬼に通ずる。それが喪われた最強の呼吸の極意で……なんとも英雄譚の主役らしい逸話だ。

この世界は現実であるので、一概に主人公である事をあてには出来ないが、それを除いてもやはりあり得ないとは言いい切れない。

「あの……？煉獄さん？」

「……鬼殺隊が現在用いる呼吸は、主だつて五つの流派に分かれている。それは知っているっ。」

「五つ、ですか？えっと、水と雷と……」

「炎に風、岩。この五つが多くの派生呼吸の基盤となっているんだ。しかし、呼吸法の全ての始まりはたった一つ。全ての呼吸がその派生なんだよ」

「そう、……なのか？」

「えっなんで今俺にふるの!? 知らないよ!? ここまでもろくにわかんないで話聞いてたよ俺は! つて言うか俺が聞いていい話なのこれ!? なんか壮大じゃない!」

「ぼかーんとしていた我妻君が竈門君の声で徐に覚醒したようにまくし立てる。反応の大きい子だなあ。真面目に考え込んでいたのに、和まされてしまう。」

ふと悪戯心が湧いて、声を潜め神妙に囁いた。

「……因みに今は情報も資料も残っていないくて、関係者は殆ど命を落としてしまっているんだよ……」

「い……イヤ——!! (汚い高音) 何それ何それ何なのそれどう言う事なの呪いの呼吸なの!? ヤダヤダヤダヤダヤダ怖い怖い怖い怖い!! ねえ大丈夫!? 大丈夫ですか!? これは俺が聞いていい話なんですか!? ヤバイ話じゃないんブゲエツ」

「ウルセエ——ツ!! ギャアギャア騒ぐんじゃねえ!! この紋逸ヤロウ!!」

「だから俺は……待ってなんで紋逸を罵倒みたいに使ってんの!? 何で!? 俺の名前罵倒換算なの!? いや俺の名前じゃないけどさ!」

飛び上がる様に我妻君に突っ込みながら覚醒した嘴平君と、我妻君が賑やかに言い合いを始める。

ああ、いいなあ、仲良しだな。鬼殺隊にいる皆年の頃的には中学生高校生なんだよな、と、改めて感じる。ほっこりしながら、改めて竈門君に向き直った。

「だから今の多くの隊士は存在さえ知らないんだ。でもその名は残るところには残ってる。僕の生家にある歴代炎柱の書にも、僅かながら載っていたよ」

「ぴ、と人差し指を立てる。お館様の様にそれで周囲を鎮まらせることは出来ないけど、竈門君は注目してくれた。」

「全ての祖にして、最強の鬼殺の法。日の呼吸」

「日の……呼吸」

「ヒノカミ神楽は、この呼吸に関係があるかも——」

「——いつまで休憩時間にするおつもりですか？」

「現れた胡蝶さんの笑みが般若に思えたのは、流石に失礼なので墓まで持つて行こうと思おう。」

「とりあえず竈門君とは後日改めて連絡を取ることにして、僕はその怒りが爆発する前に蝶屋敷を去ったのでした……。」

「逃げたと言われても構わない。」

「胡蝶さん、本当に怒ると怖いからね。」

宇髄天元と 煉獄さん

「あの鬼連れに構ってるって？」

任務の経由地で偶々行き合つて、一緒に食事をする事になった宇髄さんが徐に言つた。お嫁さん達は今別行動中らしい。

どこから情報を手に入れたかはまあいい。宇髄さんは忍の出なので何かそう言う関係だろう。

でも一体何を聞いてそうなったんだらうか？構つたと言えば構つたけど、それは僕が元からやつてる研究の為だと分かるだろうに。

いや、分かつて聞いてるのか。宇髄さんも宇髄さんなりに、竈門君を見極めようとしてゐるんだ。その為に直接関わつた僕から話を聞こうと言うことだな。

「彼と一緒に行動してる嘴平君が独自の呼吸の使い手なんですよ。その聴取の際、彼の家に伝わると言う神楽について相談されました」

「ほお、神楽たあ面白いじゃねえか。派手なやつか？」

「内容についてはまだ聴取していませんが、神楽に伴う呼吸法が先日的那田蜘蛛山で下弦の鬼に通用したそうです」

ふうふうと息を吹きかけて、そつと湯呑に口をつける。あ、ここのお茶美味しい。

「僕としてはそれに大いに興味がありますので、機能回復訓練後にもう一度会おうと考えています」

「有用なのか」

「希少な呼吸の手がかりかもしれないし、もしかするとそれ自体がそうかもしれない。鬼舞辻無惨が彼に接触した事も関わりがあるかもしれない……どちらにせよ、彼が神楽を使いこなす様になれば、鬼殺隊にとつて重要な存在になるかと」

「重要、なあ？」

まるで本気にしていない声音だ。それでも一応僕の意見に耳を傾けるつもりはあるらしい。

宇髓さんはすぐ派手だ爆破だと言いつつ割に、常識をしつかり意識して行動できる人だ。面白がつて悪ノリする時を除いては、会議でも結構頼りに出来る。

偶に伊黒さんの嫌味がぐっさり刺さった僕が言葉に詰まった時など、察して茶々を入れる風に助け舟を出してくれる事もあるくらいだ。

豪快な振る舞いの中で冷静さを保ち、しようと思えば繊細な気配りもこなせる。一人の柱として、やはり尊敬できる人だ。悪ノリはやめて欲しいけど。

思いながら向かいに座った宇髓さんを見た時、ふと残像の様に白黒の画像が脳裏に

蘇った。白昼夢にも似たそれに、口から言葉が転がり出る。

「宇髓さん、きつと彼らを継子にしたがりますよ」

「はあ？ 何で俺が」

「将来有望な子、好きでしょ？」

「いるか、あんな地味なガキ。口だけデカくても何ともなりやしねえ」

心底嫌そうに手を払う宇髓さんは、本当に継子なんて考えてすらいないようだ。今の一瞬の記憶でははつきり継子宣言をしていたと思うけど、もしかしたらまだ先に何か切っ掛けがあるのかもしれないな。

そこに僕は、いないかもしれないんだよな。

「おい」

「はこっ」

顔を上げると、びしりと目と鼻の先に指が突きつけられた。今日も綺麗に爪紅が塗られている。彼の拘りが垣間見えた。

「お前はどうかんだ、煉獄」

「僕ですか？ どう、とは何が？」

「継子だ継子！ 今してた話だろ、惚けてんじゃねえ」

「ああ……」

そこを掘ってくるのか。曖昧な声を出した僕に、宇髄さんは溜息をついてからお茶をガツと飲み干した。

すっごいな、結構熱いのにこのお茶。これも忍の技術なんだろうか。猫舌だと忍にならないのかな？それって結構大変そう。

「人に勧めるって事はお前がそいつを認めてるって事だろうか」

「そうなりますかね」

「甘露寺以外一人も継子を取ってねえだろ。お前が面倒見りゃいいじゃねえかよ」

「甘露寺さんは継子じゃなくて、選別前の稽古をしただけです」

「似たようなもんだろ」

全く違うと思う。僕は進路に迷っていたらしい甘露寺さんに偶々任務中出会い、どう言う訳か入隊を望んだ彼女に鬼殺隊への中継ぎをしただけだ。

その中で炎の呼吸の適性を見せた甘露寺さんだったが、偶々育手が近年存在していなかった為、僕が稽古を付けざるを得なかったのである。鬼殺隊に入るきっかけになってしまった以上、放り出すのは無責任と面倒を見た。

しかし甘露寺さんはあつという間に独自の呼吸と戦闘法を見出して選別を突破し、僕の手を離れた。その後は偶に文を交わしたりしただけで、自分の力で彼女は柱に上り詰めたのだ。継子なんておこがましくてとても言えやしない。

「そもそも僕は人を育てられるような度量も力量も持つていないし、自分と任務の事で手一杯ですよ」

毎日毎日、生き抜き、名に恥じぬ働きをする為に切磋琢磨する日々。

どれだけ稽古しても、どれだけ研究しても、どれだけ鬼を殺しても足りない。

届かない事に絶望し、それでも己を鼓舞して、前へ前へと進み続ける。

必死に足掻かねば走る事さえ出来ない僕が、人を育てる事などできる筈がない。

「オメエ本当妙なところで派手に卑屈だな。もうちよつと自信持てや」

「派手な卑屈とは……？」

「カツ丼三人前親子丼三人前豚丼三人前きつねうどんと天ぷらそばと月見うどんお待ちーッ」

「あつ全部僕です、ありがとうございます」

「……相変わらず派手に食うよな」

「食べるのも鍛錬の内ですからね」

にっこり笑って箸を持つ。宇髄さんの食事が運ばれてきてから手を合わせた。

「いただきます」

すぐに手近なカツ丼に手をつけた。うん、衣がザクザクで美味しい。呆れたような宇髄さんの視線を感じつつ、汁物としてうどんとそばを挟みながら着々と平らげていく。

因みに麵類を汁物とする食べ方は甘露寺さんがやっていたものを取り入れた。甘露寺さんはその特異体質から凄まじい健啖家で、「ご飯物だけじゃ物足りないんです」と言いながら交互に平らげていっていったものだ。甘味の時は汁粉をお茶代わりに団子を食べるような勢いだった。

稽古の合間に拉麵を食べに連れていったら、炒飯と餃子で三角食べして、美味しい美味い店を空にするほど食べていたつけ。最終的には店で一番大きい皿で中華鍋ごとかな？ つて感じの炒飯が運ばれてきた。なんかもう凄かった。

洋食屋に連れていってしまった時は、危うく借金を背負うことになるのではと思うくらいに食べていた。こっそり財布を見ながらすぐドキドキした。

懐かしい思い出だ。甘露寺さんとは、鍛錬以外はそういう食べ物のことばかりが記憶に残る。

（あの子達も結構よくお団子を食べてたなあ。嘴平君や竈門君は、元々山暮らしだつけ。あんまり色んな食べ物を食べた事がないのかも）

団子で目を輝かせるくらいだから、ミルクホールみたいな洋菓子を出す所に連れていったら、面白い反応してくれそうだな。

竈門君は物珍しそうにキョロキョロして、嘴平君は猪頭でちよつと止められそう。我妻君は女の子に弱いから、女給さんの白エプロンにドキドキするんじゃないか

なあ。三人でたくさん騒いで、女給さんに注意されちゃうかも。

鬼の子は、きつと食べられないんだろうな。昼は外にも出れないけど、鬼でも女の子だからおしやれなもの好きかもしれない。洋菓子は綺麗なものが多いから、竈門君は見せるだけでもあげたがるかも。

その時、鬼の子はどんな顔をするんだろう。裁判の時しか見ていないから、鬼としてののくらしい精神が蝕まれているのかは分からない。稀血を耐えることが出来ても、その心に人らしさは残っているんだろうか。

でもきつと、愛らしく微笑むような気がする。とても別嬪さんだったように思うから、我妻君もそれに大喜びするかもしれない。大きな声を上げて、それにまた煩いって嘴平君が怒るかな。

あの子達の前にある道は、平らじゃない。道があるかさえわからない。

鬼殺隊で鬼を連れ、進むというのはそういうことだ。多くに批判され、敵の多い中進まなければならぬだろう。

でもきつとその中で、あの子達は、繋いだ手を離さない。戦いの日々の中でも、その糸間に笑い合って歩いていく。

(……その様を、傍で見守ることが出来たら)

きつと、楽しいだろうなあ。

店を出ると、バサリと舞い降りたのは僕の鋌鴉だった。物静かで、指令を言う時は絶対に肩に止まる。

「……指令。無限列車へ赴キ、調査セヨ」

「——ああ、」

「四十人余リノ人間、調査ニ出タ数人ガ行方不明。柱トシテ調査シ、鬼ヲ発見次第討伐セヨ」

……もう、なのか。

「おい。……おい、煉獄！」

「え？あ、はい」

「何ボサツとしてる、任務なんだろうが」

少しぼうつとしてしまったらしい。宇髄さんに叱られてしまった。

鴉も心なしか心配そうな目で僕を覗き込んでいる。ごめんね、と撫でながら、考えていた事を呟く。

「……終わったら、」

「あん？」

「この任務を、あの子達と一緒に、誰も死なせずに終えられたら」

継子の事を、考えても良いかもしれない。

そう思ったけど、途中で言うのをやめた。なんだか縁起でもないように思えたのだ。そういう様式美じみた話は、昔よく読んだ。

「終えられたら何だよ」

「悪い験担ぎになりそうなので、言うのをやめます」

「ハアア？」

「じゃ、宇髄さん。ここで失礼しますね。奥様方によろしくお伝えください」
会釈をして、歩き出す。スウ、と深く息を吸い込んだ。

——運命になど、負けるものか。

かまぼこ隊と煉獄家道中の「煉獄さん」

「お、全集中の常中ができるようになってるみたいだね」

偉いなあ、と頷くと皆ちよつと照れたような顔をした。正確には嘴平君は被り物で顔が見えず、「ホワホワさせんじゃねえー」と怒っていたけど。

任務先の無限列車は丁度自宅を經由して行ける場所から出ていたので、一回家に寄る事にした。その前に竈門君とも連絡を取り、近くの藤の家で彼らと落ち合ったのである。

任務の事は告げていない。纏めてある資料を取って、任務までの道中話そう、と言う事にしてある。そのまま無限列車に乗り調査する予定だ。

柱の任務になし崩しに同行させようと言うのは中々酷かもしれないが、その位は乗り越えてもらわないと困る。鬼を連れる以上、竈門君には相応の実力を持つてもらわなければならぬし、それは一緒に行動する嘴平君、我妻君も同じ事だ。

機会があるかは分からないが、この機会に實際鬼の子の様子も見ておきたい。竈門君の言葉通り、戦う事が出来るのか。結果によつては、公に竈門兄妹を認めてあげたいと

思っている。皆頑張ってほしい。

「常中は柱への道の一步だ。一万歩の内の一步かもしれないけど、大きな進歩には違くないよ。竈門君は水の呼吸の方かな？」

「はい、ヒノカミ神楽は使うだけで凄く負担で、続けてはまだ……」

「出来る時に練習だけはしておくよ。知つていてもいざと言う時に使えなければ意味がないからね。使っていけば身体の方が馴染んでいくさ」

「はい！頑張ります！」

「良い返事。さ、行こうか」

三人を促して歩き出す。その時に目に入った竈門君の背負う箱は、きちんと修理されているようだった。

不死川さん凄く容赦なく刺してたけど、その穴も塞いであるみたいだ。日光が入ると致命傷だから当たり前か。

「妹さん、元氣？」

「え？」

「結構な勢いで刺されてたでしょう。蝶屋敷では見かけなかったし、大丈夫だった？」

「えっ禰豆子ちゃん刺されたの!?!誰に!?!誰にですか!?!報復を、報復をせねば!!女の子に手をあげる奴は即粛清イイイイ!!」

ぎゃん!と元気になつて喚く我妻君。あ、やっぱり鬼の子の事好きなんだね。そんな気はしてた。

この子が甘露寺さんと会つたらどうなるんだらうなあ。一途に鬼の子を思うのか甘露寺さんの色んな庄に負けるのか……ちよつと気になる。

鯉口切る勢いで奮起してるのはいいけど、多分今の我妻君だと歯牙にもかかけられない。下手に暴走しては困るので、そつとやる気を奪つておく事にしよう。

「不死川さんは風柱で、物凄い血の気が多くて、傷だらけで目が常に血走つてて、滅茶苦茶に強くて、時々自分で腕を切つたりして、鬼を容赦なく惨殺しては高笑いしてる感じの人だよ」

「エ……め、めつちや怖そう……それ人間ですか……?新手の鬼ではなく……?」

「比喩としての鬼なら合つてる気がするかな、同じ柱にもしよつちゆう殺気向けてて正直凄く怖いよ?」

「ヒョエ……」

我妻君はそつと刀から手を離し、竈門君の箱に向かって悲しげに囁いた。

「弱い俺を許して、禰豆子ちゃん……」

「その人に頭突きしたい時はどこに行けばいいですか?」

「たああんじろおおお!?!聞いてた!?!今聞いてた!?!凄い怖い人だよ!?!そんだけ怖いと殺す

のが鬼だけとは限らないよ!? 禰豆子ちゃんの身の安全の為に今後は近づかない方が
良いって!!」

「そいつ強えのか!? 俺とどつちが強い!」

「お前それ挑む気でしょ!? 絶対挑む気で聞いているでしょ!? 止めろってえええ自ら進んで
命捨てるんじゃないよお前達はさあああ」

「風屋敷に住んでるけど、任務もあるからいつもは居ないよ。そのうち会う機会もある
さ」

「そんで普通に答えなくてくださいよ!! 絶対こいつ行くに決まってるでしょ!? 本気の音
しかなないもん!!」

さっきまでの暴走気味な様子が嘘のように、善逸君は涙目になりながら叫んでいる。

いつもこんなに騒がしいのかな? 賑やかで楽しいな。

「不死川さんは僕より強いよ。僕は柱で一番弱いから、あまり比較にならないけどね」
手合わせをした事はないけど、まず間違い無いだろう。

条件を満たして、それでも尚柱就任に反対を受けたのは、現在の柱の中で僕だけ
みたいなものだ。時透君が就任する時、悲鳴嶼さんが幼さに難色を示したそうだけど、
それも彼の實力によって承認された。

未だに柱に相応しくないと、そう言われ続けているのは僕だけだと思う。きっと僕だ

けが、まだ認められる程の成果を出せていないという事だろう。

「天国、弱えのか？」

うーん、一字違いでだいぶ違う。

嘴平君は人の名前を覚えるのが苦手みたいだから、仕方ないのかな。

「でもお前メツチャ強え気配するぞ」

「ありがとう。それだけ他の柱の皆さんが強いつて事だよ。名に恥じないよう努力はしてるけど、それでも肩を並べられてる訳じゃないんだ」

「そうなの……？柱つて化け物の集いなの……？この人で最弱つて嘘すぎでしょ……絶
対遭遇したくねえ……」

「そうかなあ……」

素直に怯える我妻君と、首を捻る竈門君。

竈門君、何となく思つてたけど、凄く優しい子なんだろうな。言動の端々から、そういう根の性格が滲み出てる。妹思いで、凄くいい子だ。

ちよつと頭が固そうだけど、それも愛嬌の内だろう。一生懸命頑張つていて、健気で可愛い。

そんな子が悲しむ所は見たくないの、鬼の子には頑張つて欲しいと思う。これからも人を喰わず、そして竈門君が言うように鬼殺隊として戦える子であつて欲しい。

まだちゃんと顔合わせもしてないけど、頑張つてね。そう心の中で箱に対し告げた。

「何にせよ日々精進あるのみさ。呼吸の研究もその為に始めたんだ」

「その資料を見せてもらえるんですよね？」

「うん。次の任務まで間がないから、話は移動中にするしか無いんだけどね。知つておいて損はないから、二人も付き合つてもらおうよ」

「は、はあ……それで俺達、今どこに向かつてるんです？」

あれ？ 竈門君に鴉で伝えた筈だけど、伝わってないのかな。視線を送ると、竈門君はキョトンとしている。多分普通に伝え忘れたか、伝えつもりでうまく伝わってなかっただろうなと思う。

しつかりしてる子だけど、時々こう言う事があるのかな。年相応という感じでホツとする。

「資料を保管してある場所に一度寄つてから出発する。つまり、僕の家からね」
言つてる間にも、もうすぐそこに門が見える所だ。

「お帰りなさいませ兄上!!」

「うわ同じ顔だ……」

「小せえ原木だ!!」

いつも通り元気よく出てきた杏寿郎の顔を、みんな僕の後ろからマジマジと見てい
る。

うん、初めては驚くよね。我が家の遺伝子濃すぎるもん。普通に怖い。

そしてまた違う名前になったね？今度は木になっちゃったよ。椎茸でも生やしたら
いいのかな。

「ただいま、杏寿郎。少し寄るだけでごめんね」

「いいえ!! 兄上が顔を見せてくださるだけで俺はとても嬉しいです!!」

「(声デカくない?)」

「(どこを見ているんだろう……)」

二人の心の声が聞こえるようだよ。

杏寿郎は昔から声大きい子で、生まれた最初の産声で母上は鼓膜が破れそうだった
という。まん丸な目はどこを見ているか捉え辛く、僕も時々不思議な気持ちになつてし
まう事がある。

でもとつてもいい子なんだよ。自慢の弟だ。

概ね予想通りの反応にほっこりしていると、杏寿郎が「よもや」といつもより少し静
かな声を上げた。

「そちらの方々は、兄上の継子ですか？」

「いや、呼吸の研究関連で少しね。皆高い素質を備えた子だ、僕の継子には勿体無いよ」
「そうですか!!良かった!!」

え、良かったって何？

「杏寿郎？」

「では俺はお茶を入れてきます!!兄上のお部屋にお持ちしますね!!」

「ああいや、資料を取ったらすぐに……」

言葉が終わる前に飛んでいってしまったので、お茶が運ばれてくる事が確定してしまっただけだ。
「……。」

「おみよさんに教わった気配りを発揮したかったのかな？三人の紹介もしてないのに……。」
まあ、元から少しせつちかちな所のある子だから仕方ない。お茶の腕が上がっているのか、楽しみにしよう。

「仕方ない、とりあえず僕の部屋に行こうか」

振り向くと、三人は僕を黙って見上げた。

え、どうしたの。何かあった？

「……俺達、素質ありますか？」

「うん。三人共将来は柱になれてもおかしくない逸材だと思ってるよ」

短期間で常中を会得するに至ったこともそうだ。存在すら知らず伸び悩んで、挫折する隊士だって少ない訳じゃない。そもそも常中ができず諦める者だっている。昨今はそう言った隊士の方が多いくらいだ。

そんな中、癸の隊士が下弦討伐を生き抜き、常中を会得した。これは快挙であるし、鬼連れであることをさして置いても将来を期待してしまうというものだ。

「さ、履き物を脱いで上がりなさい。部屋に案内するよ」

そう促すと、暫く固まったもののなんとか動き出して、少しギクシヤクしながら付いてくる。

なんか、実力を評価されるのに慣れてないのかな？つまり照れてるんだ。可愛いものである。

研究書と “煉獄さん”

部屋に案内すると、中を見回して三人共驚いた顔をした。ちよつと恥ずかしいな、普段この部屋にはそんなに人を入れないから。

「こゝ、これが呼吸の資料ですか!？」

「ビラビラしてやがる!」

「いやあ、片付いてなくて恥ずかしい限りで」

驚かれるのも仕方がない。研究を纏める時の雑書きや概要をベタベタと壁に付けまくっているのである。

内容を清書して纏め直したら外して行つても良いんだけど、和綴にした資料は一目で何を書いてあるか分からない。こつちの方が便利かもな、と何となく残しておいたら、いつのまにやら壁一面が埋め尽くされてしまった。

実際便利だからやめるにやめられないんだよな。ちよつと思ひ返したい時なんかはこれで十分だから。

初期に炎の呼吸の指南書を紐解いて、自分で鍛錬を考えていた頃の覚書も貼ったままなので、ちよつと見苦しいかもしれない。

いやちよつとどころじゃいな。杏寿郎がお茶を持ってくるんじゃないやなかつたら絶対通してない。結構恥ずかしい。

「貼られすぎて最早呪いの部屋みたい……」

「こら善逸、失礼だぞ！」

「そつちは自分用の覚書だから気にしないで。えー、日の呼吸の資料は……あんまり触らないし増えないから多分箱の方かな、ちよつと待ってて」

文机の横の葛籠を開ける。本棚もあるけど、余り更新頻度の高くない物と古い記録はこちらに保管しているのだ。

本棚、もういっぱいだしね。

「纏めた物もあるんですね。凄くたくさんだ……」

「隊士になった頃からずつと作ってるからね。書庫にはまだあるよ」

同じ任務になった隊士や、会う事ができた各呼吸の育手の方からも聴取してきた。個人情報保護法が無いのいいことに、のべつ幕なし書き残してきている。

いつか役に立つかも知れないし、僕自身もいつでも見返せるようにしたいからね。それに目に見えて成果が分かると、少しだけ安心できる。僕は頑張ってる、つて少し自分を認められるんだ。

「ほら………主要な呼吸の簡易統括があるから、見ていなさい。黄色い表紙が雷、青

が水だ」

「いいんですか？」

「鍛錬には肉体だけじゃなく学びも重要だよ。僕の持論だけどね。嘴平君は、」

「俺は読めねえ!!」

「うーん、じゃあ……」

手持ち無沙汰にさせて置くと男の子は大変だからなあ。嘴平君は退屈させると良くなさそうなタイプだし、何かしてもらった方がいい。

「そうだ、確か知恵の輪があつたな」

「チエ……? 誰だ?」

「えーと、ほらコレ。珍しくって買ったんだ」

文机の引き出しから出した箱を開けると、金属の輪がつながつたものや木が組み合わさつた細工が入っている。私の頃に好きで、この時代にもあることを知って少し懐かしくて時々買つてしまつていゝのだ。

「この輪と輪が繋がつた飾りを、曲げずに切らずに分離させるんだ。力技ではなく頭を使う必要があるから、知恵の輪と呼ばれる」

「なんで曲げたらダメなんだ、メンド臭え! 大体鉄の輪だろ、ぜつてえ無理だ!」

「つまり、頭の中身を強くする道具だよ」

「頭強くてできるのか!? 権三郎みてえに固くなるか!」

「竈門君かな? そういう事じゃ無いなあ……」

柔らかくするっていうと弱いってことだっけって言いそうだしな。いや、身体が柔軟だからそこに合わせたら聞いてくれるかな?

嘴平君は素直だけど、強さには拘りがあるみたいだから、その点少し言い回しを考えなきゃいけない。

どう言うか悩みながら手癖で分離させると、ビクツ!!と嘴平君が飛び上がった。比喩じゃなく。

「!??!?!」 今どうなった!? なんて外れたんだ!? 千切ってねえのに!」

「ああ、これは隙間と隙間を重ね合わせて、こう」

今度は嵌めて見せると、嘴平君は声を上げて大喜びした。フンフン荒くなった鼻息が凄い。

「すげえ! すげえ! なんでだ!? すげえ!」

「やってみる? 曲げないで外すんだよ」

「よこせ!!」

僕の手から知恵の輪を塗り取った嘴平君が早速ガチャガチャ言わせ始める。音を立てないでやると出来やすいよ、と言うと途端にそうっと動かし出した。うん。やっぱり

良い子だ。

妙に語彙がある所もあるし、地頭は悪くないみたいだから結構すぐ出来るようになるだろう。思いながら、僕は葛籠の中を検分する作業に戻った。

が、どうにも見つからない。手元にいつももあるはずだけど……うーんと思いついて、ひよつとすると前の整理で持っていた方に紛れたかもしれないと思いついた。

一応黒表紙で目立つようにしてるけど、薄いから混ざりやすいんだよなあ。

「ちよつと書庫まで行つてくるから、ここで待つていてね。じき杏寿郎がお茶を持ってくると思うから」

「あ、俺達も……」

「大丈夫、すぐ戻つてくるよ」

笑つて部屋を出て、せかせかと歩く。書庫は屋敷の中で窓がない一室を使っている。時々研究の事を聞きつけてやってきた人を入れる事もあるので、玄関に寄つた一部屋だ。

薄暗い部屋の壁一面に本棚が並び、部屋にあつたのと同じ葛籠も幾つか。作成日と種類の見出しをつけてある。最初の方にはつけていた手帳をそのまま残して、しばらくしてから自分で綴じた物が並ぶ。

そろそろまた虫干しした方が良さそうだな、と思ひながら、薄暗いので机に置いてあ

るランプを灯し、一番新しい一角を探り始めた。

それにしても、本当にたくさん書いたもんだ。ずっと必死で足掻いてきた、その証がここに残っている。時に馬鹿にされ時に憐まれ、それでもいつか糧になるはずと書き留め、纏め続けてきた。

懐かしくて、少し恥ずかしい。僕は書き記してきたこの一割でも、知識を物にできているだろうか？

この行為に、本当に意味があるのだろうか？

『千寿郎はとても頑張り屋だね。それに、優しい子だ』

疑念が生まれてしまう時はいつも、初めてお館様にお目通りした時、そう言つて頂いたのを思い出す。

柱になる時、産屋敷に記録があつたら見せて欲しいと手について頼み込んだら、逆に僕の記録を見せるよう依頼された。その場では持ち歩く覚書の手帳しか手元になく、仕方なくそれを差し出した。

万年筆で箇条書きに書き綴つたそれは恐ろしいほど乱筆で、本当はお見せしたくなかつたが、直々に言われて断れるはずもない。脂汗をかきながら差し出して、俯いてお館様が奥様に聞きながらページをめくる音を聞いていた。

長く長く感じられる時間が過ぎて、手帳が閉じられた時に、お館様が下さったのがその言葉だった。

『呼吸の記録を残すことは、剣士達の事が残るのと同じだ。私は誰も忘れた事はないけれど、君がこうして書き起こしてくれる事で、後の隊士も彼等を知り、己の糧としてくれるだろうね。取り組める者が居ないから、これまでほぼ直伝とするしかなかったけれど、それで失われてしまった物も沢山ある』

そんな崇高なことを考えてなどいなかった。自分の為に、低い才でも鬼殺隊で戦い抜く為に始めた事だ。臆げに他の呼吸のコツを流用することもできると覚えていたから、取り組み始めただけだ。

邪険にされて聞けなかった事もある。快く教えてくれた隊士が、その翌日に亡くなったりした事もある。

それでも自分が強くなる為と、続けてきた。何の為になると、破り捨てたくなる夜を何度も越えて。

『ありがとう、千寿郎。君の努力が、他の剣士達をも導き、繋げてくれるだろう』

目の前に膝をつき、お館様が僕の手を取った。手帳を手ずから載せて、上から僕の手を包み込む。

病に蝕まれ、男性なのか細い手だ。タコや豆など一つもない。日を受けた事が無い

と思えるほど白いその手が、けれど自分より遥かに大きく、とても暖かく思えた。

『立ち上がり、刀を取ることを選んでくれた君が持つこの強さを、私はとても嬉しく思うよ』

柔らかい笑みが揺らいで、頬が濡れる。それは母が亡くなつた時以来の涙で、お館様が宥めて下さっている間、止まる事がなかった。

自分の行いを、努力を認められた事が嬉しくて、幸せで、そして――

哀しくて、仕方が無かつた事を。

時が過ぎた今も、よく覚えている。

（褒められて悲しかつたなんて、他の柱に知られたら凄いことになりそうだから誰にも言つてないけどね……）

まあ、柱はそれぞれ就任前に一度はお館様と一人でお話しさせて頂く機会があり、殆どがその内容を自分の胸に秘めている。聞いたのは就任後嬉しそうに話してくれた甘露寺さんくらいだ。多分これからも、誰かに言うような事はないだろう。

それ以降、習慣は少しだけ変わった。手帳に書くだけだった記録をしっかりと書き起し、一冊綴じ上がる毎にお館様に写本をお納めしている。

装丁や綴じ方にも気を使い、そうやって整頓していくうちに、呼吸の研究は僕の生業の一つとして落ち着いた。時にはそれを知った隊士が資料の閲覧を頼んで来ることもある。

形にして残す事が、本当にいい事なのかは分からない。鬼殺隊は非公式の組織。藤の花の家紋を持つ人々の他は、その存在さえ知らずに一生を過ごしていく。それが当然で、あるべき姿だ。こうして残しておく事で、いつか要らぬ混乱を招く事もあるかもしれない。

それでも僕は、こうして綴り続けている。ただ、自分の安寧の為に。お館様の言葉を免罪符のようにして。

「あ、」

何十冊目かの綴りを分けて、漸く黒い表紙のそれが手に取れた時、遠くで怒鳴り声が出て、咄嗟に懐に入れて書庫を飛び出した。

煉獄槇寿郎と 煉獄さん //

「やめてください!! 兄上のお客人ですよ!!」

「イヤ、アアアアアア!!」

一番に聞こえたのは杏寿郎の声だった。ついで我妻君の悲鳴に、バキバキと立て続けに物がへしやげる音。嘴平君と竈門君の声も混ざっていた。

良からぬ事が起こっているとすぐに察し、床を砕かぬ程度に呼吸を傾けて一足に音のした、部屋の前へ行く。

「どうした!?! 杏寿、」

着くなり室内から飛んできた物を咄嗟に受け止めたと思えば、それが弟だったので一瞬混乱してしまった。しかし部屋の中を見て、すぐに切り替える。

「……千寿郎、これは一体どう言う事だ……!」

一人の少年、竈門君を捻じ伏せて。そこにいる人が瞳に憎悪にすら見える物を煮やし、此方を睨め付ける。

我妻君は壁際で竈門君の箱を隠すように覆い被さりながら震え、嘴平君は姿が見えな

い。障子が一枚骨ごと破れ吹き飛んでいるので、外に投げ飛ばされでもしたか。そこら中に壁から剥がれた紙が散乱している。

腕の中で呻く弟の頬が赤くなっている。床に湯呑みが割れ、茶が畳に染み込んでいた。

ああこれは、僕の判断が間違っていた。

「……父上」

竈門君の額と、耳飾りを見た時から懸念はしていたのだ。父とこの子が対面すれば、ただ事で済む事は無かろうと。

それでもここに連れてきたのは、意図の内ではあった。僕の部屋に通す計算違いはあったとは言え、元からその存在を少しだけ匂わせるつもりだった。

父の時間は停滞を続けている。強引だが、そこへ刺激を与える気はあったのだ。利用している自覚も負い目もあつたが、何せ僕には時間が十分にならないかもしれない。

しかし、僕の目の届かぬ所で会わせる気はなかった。最初通す気だった書庫室なら、父は寄り付く事がない。そこへ通し、出る前に少し父に声をかけていく際に一目だけ。それで動揺させるかと考えていた。

父が激昂したらそれから守るつもりだったし、怪我の一つさえ負わせる気はなかった。

それがこの事態だ。僕の拙い目論見など、何にもなりはしないと云われているようだ。

意識のある杏寿郎をそつと下ろして背に庇う。兄上、と小さく声を上げるのを撫でて留めた。

「父上、彼を離してください。その少年達は僕が招いた、鬼殺隊の隊士です」

「誰の許可を得て敷居を跨がせた！ここは俺の家だぞ！」

普段は誰が来ても目の前にしなければ素知らぬ顔だが、恐らく竈門君の装いの為か。湧き立つ感情に、父の思考が凝っている。それがまざまざと感じられて、辛い。

けれど、ここで引くわけには行かない。いつもの様に受け止めるだけでは駄目なのだ。ここには、守らなければならない子達がいる。

「他でもなく、僕が許可をしました」

「なんだと……!?!」

「今この屋敷の生計を立てているのは僕です。僕が維持費と生活費の殆どを賄っている。ここは父上の家ですが、同時に僕の家です」

言い放った言葉に、父が少し目を見開いた。

「父上こそ、僕の客人への狼藉はお控えください」

そう言い終わるか否かのところで、壊れた障子の隣が外からさらに突き破られる。甲

高い声で善逸君が悲鳴を上げた。

グルンと回って立ち上がった嘴平君が、父に叫び立てる。

「何だテメエこのクソギョロ目！満足と同じ顔しやがって！」

嘴平君が父に飛び掛かろうとする。それに反射で迎撃しようとしたのだろう父の腕を掴み、半身で嘴平少年の特攻を受けた。

うつ、思ってたよりちよつと強い。嘴平君、鍛錬頑張ってるんだな。

「反則!？」

「煉獄だよ、嘴平君。少し待っててね」

「千寿郎……!？」

「言ったはずです、父上。お控えくださいと」

一息入れて、投げ技を仕掛ける。父上ならこの程度いなす事は訳ないだろうと思つての事だ。鬼殺にはあまり役に立たない柔術だが、やはり学んでおいて損はない物だ。

一度投げられた様に見せかけて、父は僕の腕を振り解いて受け身をとり、破れた障子奥の廊下へ飛び退く。その隙に竈門君を引き寄せて立ち上がらせた。

「大丈夫かい、竈門君。怪我はない？」

「は、はい……ありがとうございます」

「貴様!？」

「父上、謝罪は結構です。僕らもすぐに出ますので、お引き取りください」

「そいつが何なのか！お前は分かっているはずだろうが！何故庇う！それも、鬼を連れ
た裏切り者を！」

揺さぶりが過ぎたな。柱合会議の報告もしたが、頭に残っていない。冷静になれな
なってしまうっている。

少し酒の匂いもしたから、酔いもあるのだろう。その状態であの身のこなしが出来る
のは、流石父上と言ったところか。

「彼と妹の身柄は元水柱と現水柱が命を以って保証しています。お館様もお認めになっ
ている事です」

「そんな馬鹿げた事が認められる物か！」

「事実です。僕も今後の働きの如何では、彼らの事を信じるつもりでいます」

「煉獄さん……！」

声を上げた竈門君を後ろに促して、父の前に立つ。

「お引き取りください、父上」

「情にでも流されたか、愚か者が！所詮半端者の目では見抜けるものも見抜けまい！」

「僕は愚かな半端者ですが、この子達は違う！」

胸倉を掴まれたが、怯んではいけない。

背筋を伸ばせ。胸を張れ。何も恥じる事などない。

「彼らは鬼殺隊の未来です。将来ある者を守り、導く事は、僕が果たすべき責務です！」

——「彼」がそうした様に。

「あら、どうなさいましたの」

ほんと放り込まれた落ち着いた声に、張り詰めた空気が解けた。

「あらあら、すごい散らかり様ですこと。杏寿郎様、頬はきちんと冷やすんですよ。あらあらあら、畳がびっしより。障子まで破つてしまつて、こちらは買い替えなければいけませんね」

「……おみよさん?」

彼女は今日は非番のはずだ。何故ここに、と言いかけて、その肩に止まつた鎧鴉と目があつた。

……気を利かせて呼んでくれたわけだ。もしかして僕よりよつぽど先を見通せてるんじゃないか? ドヤ顔するでもなく素っ気なくしてる辺り、本当に、なんとというか、男前な鴉だ。

「あらあらあらあら。楨寿郎様、千寿郎様、年寄りの前でその様な無体はおよし下さいな。この婆に免じて、今日はお終いになさつて」

「……………」

「ね、榎寿郎様」

念を押す様なおみよさんの声に、父は舌打ちをして手を離れた。そのままこちらを一瞥もせず足音を荒くして去っていく。

遠くで玄関の戸を乱暴に開閉する音がしてから、おみよさんが頬に手を当てて言った。

「まあ怖い。殿方は皆やんちゃで困るわねえ」

「やんちゃで済む話じゃないよ絶対イ…………」

力が抜けた様にズルズル箱から床に倒れながらの我妻君の台詞に同意せざるを得ない。ほとんど我を失った状態の元柱が暴れて、目立つ怪我人が出なかった事が奇跡なんじゃないだろうか。

そこでハツとして、おみよさんの隣にいた弟に駆け寄った。

「杏寿郎！」

「兄上」

「痛い？痛いだろ、ああごめんね、ごめんね僕が考え足らずだったから…………」

「いいえ兄上、平気です！俺も男ですし、以前は良く喧嘩もしていましたので！不覚を取っただけです！」

「でも今回は僕のせいじゃないか」

「そんなことはありません！」

赤くなつた頬は明らかに痛いだろう。きつとそのせいで普段より声が出ていない。それなのに、杏寿郎はいつもの様に澆刺とした笑顔を見せる。

「悪いのは父上です！ 兄上のお客人に手を挙げるなど言語道断！ 兄上が謝る必要はありません！」

「杏寿郎……」

なんて優しくして強い子だろう。

感動してしまつた僕に、杏寿郎が嬉しそうに笑う。次の言葉に、思わず目を瞬いた。

「それより嬉しいです！ 兄上が怒つてくださつた！」

「え」

「自分の事じゃありませんが、久しぶりに父上に大きな声を出したでしょう！ 背中をシャンとして父上の前に立つて、とても格好良かった！」

怒つた？

……怒つたんだろうか、僕は。怒つたと言うより、反抗しただけの様な気がする。気持ち昂つていた様な気はするけど、正直最後の方は何を言っていたかあんまり覚えていない。

実は嘴平君との間に入った時とか胸倉を掴まれた時、結構怖かったんだよ……だって最近父上にあんな間近に睨まれて怒鳴られたりしてないし……。凄くドキドキした。稽古でもないのに投げちやったし。ちゃんとまともに振る舞えてたのか自信がない。

困惑する僕に、ギユツと杏寿郎が抱きついた。

「兄上！ やっぱり兄上は、俺の自慢の兄上です！ 強くて格好良い、日本一の兄上です！」
杏寿郎。そんな事は、きつとないよ。

僕より強い人間なんて鬼殺隊だけでも結構いる。

才能でいえば、僕はここにいる三人より、杏寿郎、お前よりよっぽど無いんだよ。柱になっても、お館様が認めてくださっても、僕は全然自分に自信が持てやしない。そう言うところもきつと、他の人より弱いんだ。

父上が言う僕の姿は真実だ。弱くて半端者で、実力も才能もない、無様な奴なんだ。必死にならないと周りに付いてもいけない、考え足らずで周りに危険を及ぼしてしまつた。

僕はそんな、取るに足らない男で、情けない兄なのに。

お前と父の不和を、いつもただ困り果てるばかりで、解消してさえやれないのに。

「……ありがとう」

こんな僕を、お前は誇りとしてくれるのか。

しがみ付いてくる身体に手を回した。ああ、温かいなあ。大きく、なったなあ。

「杏寿郎。お前も僕の、自慢の弟だよ」

何だか涙が出そうになるのを、懸命に堪えた。

「お願いする事になってすみません、お休みなのに」

「あら、良いんですよ。どうせ暇をして出歩いていたところをお呼ばれしたんですもの、働かせていただける方が嬉しいんですよ」

上品に笑うおみよさんにありがたく甘えて、部屋の片付けは任せることになった。修理の方も取り仕切って頂けるそうだ。本当に頭が上がらない。

杏寿郎の手当てと三人の無事の確認を済ませたら、あまり時間がなくなってしまったのだ。杏寿郎一人にも、おみよさんに任せるのもと迷っていたら、さっさと手配されてしまつてもう人が入っている。

おみよさんの手腕が早すぎて勝てない。

「伊之助お前障子の修理代払った方がいんじゃないの？て言うかなんで隣開いてんに無傷の方破つて飛び込んだわけ？超危ねえし意味もわかんない」

「知るか！あのギョロ目ヤロウが悪イんだヨ！」

「すみません、俺達のせいで……」

「いや、気にしないで。寧ろ危ない目に遭わせてごめんね」

「でも、そもそも俺達が騒ぎ過ぎたから……」

え、騒いだの？うち普段騒ぐ様な事ないからな、杏寿郎のわつしよいくらいで。それで父上様子見に来たのか……で、竈門君を見て、鬼の子にも気付いたと。

資料を読むのに何を騒ぐ事があつたんだ？と思つて聞くと、途中から嘴平君の知恵の輪が気になつて周りから口出ししたらしい。それに嘴平君が怒つてムガアと声を上げて、わちゃわちゃ騒いでいたところに父がやつてきたのだとか。

竈門君が前に出て謝つたら、その痣を見て父が突如激昂。掴みかかった所に杏寿郎が来て、嘴平君が突つ込んで吹き飛ばされるのを見て制止しようとし、殴り飛ばされてそこに僕が来たと言うわけだ。我妻君は悲鳴を上げた後咄嗟に、下ろしてあつた鬼の子入りの箱を、父に弾き飛ばされそうになつたところから避難させていたらしい。

うん、まあ別に竈門君達は悪くないな。父が取り乱したのは煩いからじゃなくて手前都合だ。日の呼吸の事とかは口にする間が無かつたらしいから、竈門君達には煩いから怒られたと取れても仕方ない。

でも都合がいい勘違いなのでそのままで行こう。

「じゃあ、修理代は要らないから、任務に一緒に参加してもらおうかな」

「任務、ですか？」

「そう。この後だつて言つたでしょ？」

にっこり笑つて見せると、我妻君が思いつきり怯えた声を出す。

「あああああああの、そ、それつて、あの、煉獄さんの任務つて事は……柱のお仕事で？」

「そうだよ」

「ア、ア——！！無理です！！無理です勘弁してください！！払います！！金を払いますからそれだけは後生だからやめて下さい柱の任務についてくなんて死んじゃうよ——！！」

ガツシリ羽織に縋つて嫌々と首を振る我妻君は子供みたいだ。仕方ない子だなあ、と軽く身を屈めて目線を合わせ、ポンと肩に手を置く。ぐすと鼻を噉つた彼に、心底すまないと言つた調子で口にする。

「ごめん、実は最初からそのつもりで連絡してあるから正式な同行者なんだ。よろしくね我妻君」

「嘘オオオ！！嘘だつて言つて！！ねえ嘘でしょ！！俺達癡だよ！！炭治郎と伊之助は兎も角俺めちやめちや弱いよ！！柱の任務になんかついていけるわけないじゃないですかああああお願いだから今から取り消してエエエエエ！！」

「黄色い人はいつもこんな風なんですか？」

「うん……そうなんだ……」

「ウルセエ!! 黙れ弱味憎!!」

「いっただあ!!」

「強え鬼が出るんだろ! 俺が頸を斬ってやる! 俺の手は強え手だ!! 次は全部斬れる!!」

この間と同じように我妻君を蹴倒した嘴平君が意気揚々と叫ぶ。この間僕が言ったこと覚えてくれてるんだな。独自解釈も入ってるみたいだけど。

うーん、取り敢えず我妻君の鼓舞は後にしよう。見送りに出て来てくれた杏寿郎に笑いかける。

「行つてくるね、杏寿郎。大事にするんだよ」

「はい! 次にお帰りになるまでに父上に仕返しをしておきます!」

「杏寿郎?」

「冗談です! さ、切り火を!」

とても冗談には聞こえなかったが、頬に当てていた濡れ手拭いを下ろして火打ち石を取り出されたので、仕方なく背を向ける。

「皆さんもどうぞ!」

「知つてんぞそれ! カチカチの奴だ!」

「ほら善逸、切り火を切つてくれるそうぞ」

「お、おん……行きだぐないよお……」

何とか全員揃ったところで、勢いよく杏寿郎が石を鳴らす。

「ご武運を！」

「うん。ありがとう」

きつと無事に帰って、またお前の笑顔を見よう。

そうして今度こそ、お前と父上の仲を取り持てたらいいんだけど……その方法はまた、帰ってから考えることにしようかな。



「ようございましたね」

部屋に入ろうとした時間こえた声に、ギクリとした。どうにも強く退けられない老婆だ。昔からどこか俯瞰したような物言いをして、まるでこちらがいつまでも子供であるかのように扱ってくる。

いつ見ても同じ穏やかそうな微笑みを浮かべ、おみよは言う。

「千寿郎様は、漸く親離れが出来始めましたね。嬉しくありませんでしたか、成長した姿を見られて」

「……親離れなど、」

とうにしていただろう。

自分の墮落を物ともせず、罵倒も気に留めず、多少悲しげな顔を見せるだけ。

才の無さにめげずただ一人鍛錬し、己と同じ事実を知りながら研究を重ね、鬼を斬り、まともな色変わりの刀さえ無しに柱となった。

近頃では、任務での人的損害が最も少ない柱、などと評されるとは……自分を案じ、未だ定期的に返信不要の文を寄越す、他ならぬ鬼殺隊の長が記したことだ。

返信不要とある事に甘え、ただ読むばかりの文は息子の事ばかりだ。自分と違い、折れずに立ち続けている、いつそ忌まわしい程に真つ直ぐな長男。

分かりやすく嫌悪を向けてくる次男の方が、いくらか扱いやすいくらいだ。

どれだけ罵られても、態度を変えず、帰宅の都度律儀に挨拶をし、反論も反抗もせずジツと理不尽なはずの仕打ちに耐え続ける。

何を考えているのかわからない。いつそ不気味だと言ってもいい。何故立ち続けられるのか、何故折れる事がないのか……考えると、己の惨めさばかりが際立って、堪らなくなる。

「どうでもいい。俺には関係のない事だ」

「千寿郎様は、貴方の叱責を受ける事に親子の關係を見出して、縋っている節がありました

た」

「……………」

「これまで反論しなかったのはその為です。いつまでも、貴方の子供でいたかつたんでしようね」

振り切つて、部屋に入ればいいものを。

足が動かず、老婆の言葉が否応なく耳に入り込む。

「貴方はいつまで、そんな千寿郎様に甘えているつもりですか？」

カツとなつて振り向くが、その時にはおみよは榎寿郎に背を向け立ち去つていく所だった。

ただその場には、途方に暮れた一人の男が残されるばかりで。

手に下げた酒瓶が水音を立てる。

その重さが、酷く虚しく思われた。

“煉獄さん”になりたかった頃

——どうしても、なりたいものがあつた。

「嫌です!!」

それは、母が病床につくより少し前の頃の話だ。

「……嫌ではない、千寿郎。聞き分けろ」

「嫌です!!」

困り顔の父に、まるで今の杏寿郎の様に声を張つた。忍び寄る涙の気配を、その頃の僕はそうやって振り払つていた。

泣けば父は一旦話をやめてくれるかもしれない。でも、それでは駄目だった。それは僕の求める姿ではなかつたから。

虚勢でも声を出すしかなかったのだ。そうしなければ、とても立つてさえいられなかつたから。その位に酷い隔たりが、僕と目指すところの間にはあつた。

「僕は諦めません!! 炎の呼吸の使い手として隊士になり、いずれ柱になるんです!!」

当時、まだ父は現役で、継子も居た。炎では無い別の呼吸を使っていたけれど、皆優秀な人達だった。熱意に溢れ、才もあつた。今はもう失われてしまったが、いつか柱となる事を期待されていた。

父は任務の合間に彼等に鍛錬をつけ、その更に間を縫つて僕に炎の呼吸を説いていた。多忙な日々だ。炎柱を務める父の時間は、無為に費やす事など許されていなかった。

だから、実の伴わないわがままを言う僕の存在は、厄介だった事だろう。けれど息子故に、無下にする事も出来ない。困り果てて眉を下げながら、父は僕を説得しようとした。

「千寿郎、賢いお前の事だ、分かっているだろう。お前に誂えた日輪刀は……」

「あ——!!!」

「うっ」

何を言われるかなど分かっていた。分かっているのに聞きたくなくて、癩癩の様にいつと大きな声を出した。突如腹の底から出した叫びに射抜かれ、父が思わず息をつまらせたのに、すかさず捲し立てる。

「嫌です!! 僕は諦めません!! 剣士になります!! 今色変わりしないからってこれからもし

ないとは限らないじゃないですか!!」

今となっては確かに半端ながら色変わりはしたのだから間違っではないのだけれど、当時はそうではなかった。

身寄りの無い者の日輪刀は選別後に打たれ、その為それまで己が真に才を持つかはわからない。しかし僕の様子が鬼狩りに関わっていたり、ついた育手の意向によつては選別よりも前に予め己の日輪刀を与えられる事がある。

日輪刀は色変わりの刀。才ある者の刃は、最初に手にしたその一度だけ染まる。

裏を返せば染まらぬ刀を持つ者は、才が無いと見なされるのが常であった。

最終選別を通過しても、隠の道を選ぶ者もいる。そういった者の一部には、日輪刀の刃が染まらなかつた為に諦めた者もあるそうだ。

現状鬼殺隊にいるのは、僅かでも日輪刀を染められた者ばかり。そうでなければ、隊士として残つた所で長く生きる事はできない。才がなければ、育つより前に鬼に殺されて終わるだけなのだから。

そういった暗黙の了解があることは、僕も分かっていた。分かっているとお、それに抗おうとしていた。

「しかしだな、」

「嫌です!!僕は炎の呼吸を継ぎます!!」

「千寿郎」

「鍛錬を増やしたので今日の分を走ってきます!!それでは!!」

頭を下げて、勢いのまま父の前から走り出す。

父が名前を呼ぶ声にも構わず、道中にすれ違った母や弟の驚いた顔もまともに見ずに、玄関から飛び出した。

「千寿郎、待たんか!話はまだ……」

「行ってきます!!」

「千寿郎!」

走って走って、父の声を振り切った頃、見計らった様に涙が出てくる。

慌てて止めようと頬を強めに叩き、紛らわす為にまた走る。

でもどうしても、鼻がツンとして、頭の奥がギユツとして、じわじわ風景が歪んでいく。

「止まれ、止まれッ」

叩いても抓っても止まらなくて、どんどん頬が濡れてしまう。

剣士になるのだから、泣き虫であつてはいけないのに。強くならねばいけないのに。感情が波打つと、どうしても止まらなくなってしまう。

そんな自分が、僕は一番嫌いだった。

「……グスッ」

真つ暗な中で、鼻を嚙る。

涙が止まらなくなってしまう時は、暗い場所で小さくなると落ち着いた。膝を抱えて丸くなつて、自分の呼吸の音だけを聞いていると、泣き虫の僕を少しづつ胸の奥に仕舞っていきけるのだ。

深く深く、息を吸つて吐く事を繰り返す。ぐちゃぐちゃになっていた気持ちが少しずつ鎮まっていく。

本当はこんな工程を挟まずに、自分の意思で落ち着かせられないといけないのだ。刀を振るう時、感情が強く波打っているとあまり良くない。分かっているのに、出来るようになれない。

時が過ぎていく都度に、成長よりも停滞が目につく。僕の歩みは余りにも遅く、一歩が拙過ぎて、返つて後退りしてしまっているようだ。

それが酷く口惜しく、もどかしい。

ゴト、と体の横が動き音を立てる。慌てて顔を膝に埋めた時、明るさが開かれた襖から差し込んだ。

「やはり……でしたか」

「あにうえ！」

母と……弟の声。聞いた途端、身が強張った。顔を伏せたまま、膝を抱く力を強くする。そのままジツとしていると、母が小さく息をつき、「杏寿郎」と弟を呼んだ。

「鏖鴉に、兄上がいたと伝えられますか？」

「あい！」

「ではお願いします。それから、玄関で父が帰ってくるのを待つて、こちらだと教えてください。よいですか？」

「あい！」

弟の覚束ない足音が部屋を出ていく。それが少し離れてから、母は改めて言った。

「千寿郎」

「……はい」

「こちらへいらつしやい」

そろそろと顔を上げると、離れた所で母は座っていた。少し躊躇したけれど、いつまでもここに居る訳にもいかない。

僕は潜んでいた場所……押し入れから這い出て母の前に行き、正座をして、また俯いた。見下ろした膝が埃で少し汚れている。

「鴉が伝えてくれるでしょうから、すぐ戻つてくると思いますが、父は今出ております」

「……はい」

「日が暮れるのに貴方がまだ走り込みから戻ってきていないと思ひ込んで、酷く慌てていました。しっかりとした子だからそんな事はしない、戻ってきて隠れているだけですと言いましたが、自分が急に言い過ぎたと、私の話も聞かずに探しに行つたのです」
思わず顔を上げる。見上げた母はいつもと同じ、冷たく冴えた美しい顔をしていた。

目が合うと少しだけ優しく瞳が緩んだけれど、すぐに強く僕を見据える。

「父が戻つたら、謝りなさい。今夜は偶々務めがありませんでしたが、任務があれば貴方が与えた懸念が刃を鈍らせてしまうやもしれませんでした。その為に、取りこぼされた命があつたかもしれないのです。わかつていますね」

「はい……申し訳、ありません」

ああ、自分が恥ずかしい。身体の年齢よりも精神は歳をとっているはずなのに。どうしてこうもままならない。

大事にされている。愛されている。そんな事は分かっている。分かっているのに。袴を握り締める僕に、再び母の言葉が降ってきた。

「千寿郎。本当は、父のおっしゃる事が分かつて居ますね？」

「……はい」

分かっている。分かっていると。僕に才能が無い事など、他でもなく僕自身が一番

理解している。

木刀を握つて振るいながら、余りにも手本と違う太刀筋に、いつも失望した。鍛錬と歳を重ねても、一向に感じられ無い進歩に絶望した。

日輪刀が無くて、父の言葉が無くて。

僕に剣士の適性など、少しも無いと、僕が一番分かつていた。

「では、何故頑なになるのですか。己の力量は、貴方自身がもう分かっているのですしよ
う」

「……嫌です」

「千寿郎」

それでも。

それでも僕は、諦めたくなかった。

「嫌です！嫌です、僕は……！」

どうしてもなりたいたいものがあつた。

いつまでも胸を焦がす炎があつた。

「母上、僕は——」

僕は、そう。

—
“彼”
みたいに、
なりたかった。

乗車する “煉獄さん”

嘴平君は生まれて初めて見る列車に大興奮だった。

とはいえ実際目にしたのは三人共が初めてだったようで、我妻君は話には聞いていたくらい。機関車を見上げてぼかんとする様子は、皆幼くて可愛らしかった。

突然又シダ勝負だと言い出したのはびっくりしたけど、駅弁の牛鍋弁当を買ってあげるとその良い匂いに気を引かれて一旦忘れてくれて助かった。弁当をどこから開けるのか一生懸命探っている嘴平君を他所に、今度は他の二人が狼狽えていたけど。

「どうしたの？ ああ、これ二人の分のお弁当。切符は無くさないようにね」

「いや……どうしたっていうか……」

「煉獄さん、それ全部食べるんですか？」

「うん。任務前だから控えめにしておこうと思って」

「控えめが弁当五個の人とか初めて見ましたけど!? え!? 本当に食べるの!? 全部!」

「食べるのも鍛錬の内だよ」

お決まりの言葉と共に三人を促して車内に移動する。予め日輪刀を隠していたので、問題なく乗車できた。この時代の警備、令和と比べるとやっぱりおおらかと言うか……

うん。助かるけどね。

廃刀令が出て数十年。当初は取締りも厳しく、鬼殺隊は苦難を強いられたらしい。任務以前に、人の中で刀を持ち、生きていくという事が困難だった。夜半鬼を斬るところを見られ、人斬りだと指名手配を受けてしまう事もあったと言う。

それでも一番規制の厳しかった頃を抜け、暫く経つと人の警戒心は薄れる。僕らにとつてはとてもありがたい事だ。

これからの時代の流れを考えると、今が一番活動しやすい時期だろう。僕以外知る事ではないけど、これから時代が進んでいくと、日本は戦争に向かつていく。警吏や軍が力を増し、徴兵され、日々の生活さえ厳しく監視されるようになる。

鬼殺隊が世に知られずに居られるのも、そう長くはあるまい。産屋敷家の手腕があればギリギリまで形を保てるだろうが、下手を打てば反社会組織として追われる立場にもなりかねない。

それは鬼も同じ。見つければ全世界に存在が知れるかもしれない。そうなれば人類の脅威として、数の暴挙により淘汰の道へ進んでいくこともあり得るだろう。その危機感から今までと違った潜み方に変化していくだろう鬼達を、探すのは難しくなっていく。

であれば、やはり今が山場と言える。例え物語の件がなくても、そう判断せざるを得

ない。

鬼舞辻無惨は千年鬼殺隊の手から逃れ、生き長らえてきた鬼だ。決して愚かではない。世の情勢も恐らく把握しているだろう。国が開かれ、変わっていく世界を理解しているだろう。

やがて己の矜持と現状を天秤にかけ、国外逃亡を図る事も有り得ないとは言えない。そうなるってしまえば、鬼殺隊が無惨を殺す事はより一層困難になってしまう。

そうなる前に、無惨を見つけ出し、その頸を斬らなければならぬ。

その糸口になるのがこの子なんだよな。隣で弁当を突く竈門君を見る。

家族を殺され、妹を鬼にされ、無惨に狙われている。日の呼吸に由来するかもしれない未知の技術を使う少年。僕の弟より少し年上なだけの、まだ幼さを残した、優しい子。視線に気付いた竈門君と目があつて、誤魔化す様に笑いかけた。

君にできる事が、僕にはほとんどない。それが少しだけ、哀しいな。

「美味しい?」

「はい!……あれ、煉獄さんもう食べ終わったんですか!」

「呼吸で強化してるからね」

「呼吸でそんな事までできるんですね……」

嘘じゃないよ本当だよ、体づくりの為に研究したんだよ。

栄養吸収の力を呼吸で底上げする事により、エネルギーを蓄え体に循環させるのだ。甘露寺さんに会ってからは彼女の体質を参考に行なっている。

まあ元々そういった身体な訳じゃないから、捌倍には全然届かないけどね。でも僕なりに最適化された筋肉はつけられていると思うんだ。

竹筒からお茶を飲みながら皆が食べ終わるのを待って、乗務員さんに容器を回収して貰ってから、さてと懐に手を入れた。

「竈門君、これ。約束していた資料だよ」

「え!?!日の呼吸のですか!?!」

「うん。丁度見つけた所で騒ぎになったんだ。渡しておくから、後で見るといい。汽車に乗ってる間はやめておくんだよ、気分が悪くなってしまうからね」

差し出すと、恐る恐る両手で受け取った竈門君がマジマジとその表紙を眺める。

「黒、なんですかね」

「日の呼吸の剣士は黒い刃の日輪刀を使ったらしいからね。それに因んである」

「そうなんですか?俺の日輪刀も黒なんです」

へえ、それはまた……意味深どころか確定的ときえ言えるな。

日輪刀の色変わりで、失伝以来適性不明と見做されてきた黒刀。僕がその記述を見つけた所で、日の呼吸の指南が誰にも出来ない以上結局どうにもならなかったし、そもそ

も僕の代に黒刀を持つ剣士は居なかった。直系の子孫の時透君は、霞の呼吸の白だったし。

黒い日輪刀、耳飾り。額の痣は別物だけど、竈門君はまるで本物の日の呼吸の剣士のようだ。ヒノカミ神楽を物にできれば、最強の座に手が届くような剣士にもなれるだろう。

その呼吸を研究させてもらえたら、もう少し僕も強くなれたりしないだろうか。

竈門君は少し黙って僕を見上げた後、大事に資料を懐にしまつてから不意に尋ねてきた。

「煉獄さんって、気持ち切り替えるのが得意なんですね」

「? どういう事?」

「匂いが……あ、俺匂いで人の気持ちが大体分かるんですけど」

「ごめんもつとどういう事?」

匂いとかそんな事ある? 耳が良いのは宇髄さんがそうだって聞いた事あるけど、鼻って……鼻が利くから気持ちがわかるって……全然意味がわからない。

「煉獄さんは感情の匂いがしても、すぐに分からなくなるんです。いつも平常心でいるとか、そういう事なんでしょうか?」

「待って、どういう匂い? 例えばどういいう匂いがしてるの?」

「えっと、今さっきは何だか羨ましそうな感じの匂いがしました！」

「うわあ」

うわあ……。

筆舌に尽くしがたい。僕は思わず頭を抱えた。

確かにちよつと思つたけどそれを察されてるの辛過ぎる。あつけらかんとした調子だから多分竈門君は全く気にしてないけど、明らかに後輩隊士に持つていい感情ではない。

気づいて欲しくなかったから表に出さないようにしてたんだよ。匂いで感情が分かつても多分その辺は竈門君解つてないな……。

通路を挟んだ席で我妻君が聞いてないふりしながらこつちを気にしてるのも地味に辛い。我妻君はそういうの察せちゃうタイプなんだよね多分。

気配りが出来るというか、人の感情の動きを常にある程度気にしてる。警戒心が強いから、地雷を踏まないようにいつも人の機微を窺っている様子がある。だから多分今も僕の気持ちを慮つてくれてるんだな。ありがたい。

窓側の席で外を見るのに夢中な嘴平君はそもそも聞いていなさそう。正直とても助かる。

というかもしかしてこれまで一緒に行動してた間の事も察されてる感じかな？竈門

君の伸び代にちよくちよく嫉妬してたとか、他の柱とか父上を怖がってた事もバレてるのかな？

うん、すごく恥ずかしい。表情とかには出てなかったはずだけど、匂いつてそんなふうやって防ぐんだ。香り袋でも持てばいいのか。

うん、兎に角羨ましい匂いには触れずに行こう。

「そうだね。普段から平常心でいるようにはしてるよ。その方が迷わず刀を振るえるんだ」

「そうなんですな！コツとかあるんですか？善逸とかにも凄く役立つと思うんですが」「だから振るなよ俺に！俺今必死に聞いてないふりしてんのわかんないの!」

「善逸は耳が良いから全部聞こえてるだろう」

あ、そうなの？それ多分語感的に宇髄さんとかあの位良いつて事だよな。

ああ……じゃあ察してるんじゃないやなくて聞こえてるのか。筋肉の収縮とかで人の大体の思考がわかるって宇髄さん前に言ってたし。理屈は分かってもやり方は分からないかったけどね。

そういうえば嘴平君の触覚もその感じなのかな？五感それぞれに鋭い子が居たりするのかも。そう言えば、昔の柱に感覚の鋭い人がいたと聞いたことがある。岩柱の継子の、不死川さんの弟君は鬼喰いをしていて聞いたが、あれは味覚と考えることもでき

るか？全く才能豊かな子達だ。

うーん、コツかあ。昔は押し入れに籠もってたけど、今は毎回そんな事をしていられない。母を亡くした頃からは、別のやり方で気持ちを落ち着かせている。

「コツというか、想像する事はあるかな」

「どんな想像ですか？」

「うん。胸の中で、火を熾すんだ」

種になるものは何でも良い。誇りでも理想でも、己の中でいつとう大事な物を、抱き続けたい物を燃やす。それを小さな火から、炎へと育て上げる。

身体を中心に燃え続ける炎。それは心臓と同じ様に、身体を突き動かす機関だ。

その炎に、僕はいつも色んなものを託す。

「嫉妬や羨望、悲哀や辛苦、後悔や恐怖。障害になり得る感情……心を、囚われてしまう前に焼べる」

「捨ててしまおうって事ですか？」

「捨てるんじゃない、燃やすんだ。燃やして、するべき事のために身体を動かす力にする。向き合うには時間が足りないから、足を止める訳にはいかないから、せめてそうやって連れて行く」

本当は、一つ一つに向き合って、受け入れて進んで行けるのが一番良い。でも僕は強

くないから、そうやっているとはし折れてしまいそうになる。自分の弱さと不甲斐なきが情けなくて堪らなくて、膝をついて蹲ってしまいそうになる。

でも、そうしている時間は僕にはない。足を止めれば追いつかない。周りの命が損なわれてしまう。与えられた役割を果たせなくなってしまう。

全てを燃やし、進まなければ、辿り着けない。

「火の熾し方は人それぞれだ。先の見えない暗闇を進む為の灯りとして静かに燃やす人もいる。誰かの道標になる為に、火そのものとして大きく明るく在ろうとする人もいる。でも、人は皆そうやって、心の火を、命を燃やして生きていると思うんだ」

いずれ消えゆく物だとしても、懸命に燃え盛る命はとても美しい。

願わくば、僕もそんな炎でありたいと思う。

……なんか、ちよつと詩的になつちやつたな？

普段人に話したりしてこなかった事だからか、言語化すると妙に恥ずかしい。

「ち……：抽象的な話してごめんね？あんまり気にしないで、そこまで役に立たないと思うから」

「いえ！凄く勉強になります！」

本心で言ってくれてるなこれ。どれだけ素直なんだ。

山育ちだからこんなに純朴なのか？眩しきさきえ感じる。心配になってきちやうよ、本

当に真つ直ぐな子だ。

「煉獄さんの強さの理由が少し分かった気がします！俺も頑張つて心を燃やしますね！」

「うっ！積極的に使つて行くんだね……吸収早いね」

「ありがとうございます！」

いや本当迂闊な事言えないなこれ。呼吸のことを話す事は多くても、自分の事とかを話す事ってあまりないから……。あー恥ずかしい！匂いの事で動揺したからかな。もう集中しなきゃ、発車の時間になるぞ。

少し熱くなつてしまった頬を手で扇いでいると、音を立てて車体が揺れた。それと同じに通路向こうの嘴平君が椅子の上でビクンと跳ねたのが見えた。うん、和む。

ガタン、ガタン。線路と車輪が組み合わさつて鳴る音が、少しずつ感覚を狭めて行く。懐かしい様で、大分違うその感覚。

窓の向こうの景色が流れて行く。眺めている間に、もう容易く止めることも下りることも出来ない速度になった。

嘴平君が窓から身を乗り出して、我妻君に止められている。ああ、ぼんやりだけど確かな既視感を感じる。そうだ、こんな始まりだったな。

「嘴平君、はしゃいで居たら危ないよ」

夢を見る “煉獄さん”

パチン、という聞き慣れない音がした。

何の音だろう？と思っただけ、顔を上げて音はどこからしたのかわからなかった。

トトン、トトン。軽やかな音と振動の中、座った人達も立った人達も、一様に自分の手元に視線を落としている。誰も音に気がついた人はいない様だった。

空耳だったのかな。何だか気恥ずかしくて、視線を落とす。手元にあるのはありふれた文庫本だ。内容も見ず、いつもの様に適当に借りてきた。

それを開いて、栞の場所から再び読み始める。手持ち無沙汰なこの時間を、塗り潰すために文字の羅列を追う。頭の中にスルスル入り込んで、端から溶けて行く文字。

そうだ。

私はいつも、そうやって時間を費やす事しか知らなかった。

電車で一時間先の高校に通っていた。判定が許す中で、一番ランクが高いのがそこだったからだ。

父も母も、普段口数が少ないのにそこにだけしつかり意見した。意見したというより指示だった。ここにしなさいと言われて、私はいと云って従った。特に行きたい所も無かったし、そうしているのが一番将来が楽だという両親の言葉を信じた。

私には友達が居なかった。両親に似たのか、口数が少なかったから。どう喋ったら良いのか分からなくて、モタモタしている内に一人ぼっちでいるのが当たり前になってしまった。だから高校を選ぶのにも、全然こだわりがなかった。

何にも楽しい事なんてなかった。ただ言いなりに学校に行つて、勉強して、帰つてくるだけだった。それ以外の時間は手持ち無沙汰だった。

だから本を読んだ。本を読んでいると、時間があつという間に過ぎて行くから。

気がつくと、人が少し減つて、座席が空いていた。

いつのまにか駅に着いていたんだな。そこへ座つて、またページをめくる。

私の毎日に、本が加わつたのはいつだったか。小学校の頃、授業で図書館に行った時だっただろうか。

手についた本を眺めている内、あつという間に授業が終わってしまった。その時、あこれには助かるな、と思つたんだ。

面白かった訳じゃない。文字をずっと追うだけで、時間を飛ばす事ができる。それは私にとって素晴らしい事だった。

家では両親が買ってくれた知恵の輪をしていられるけど、外や学校には持ち出せない。休み時間に周りの声を聞きながらぼんやりしていると、時間の流れがやけに遅くて、私はとても困っていたのだ。

それからずっと私は本を読んでいた。余った時間をどうにかやり過ごすために、色々な本を読んで、読んで、読み続けた。

ふと、また人が減っていることに気付く。あれ、また駅に着いたのか。アナウンス、あつたかな。

不思議に思いながら手元に目を向けて、驚いた。

あれ？私、今まで小説を読んだ筈なのに。

膝の上にあるのは、漫画の週刊誌に変わっていた。

漫画を読み始めたのは小学校高学年の頃だ。

ある日、間抜けにも本を学校に忘れた。家にある知恵の輪にはとづくに慣れてしまつて、すぐに解けてしまう。私の家ではテレビは父が見るものだ。同級生が言うゲームの

ようなものは、初めから買ってもらえない。

その日はいつもより長い晩を過ごさなければいけないことがほとんど決まっっていて、トボトボ帰路についていた時に、コンビニの本棚が目についた。

今まで一度も入った事がなかったのに、何故入ろうという気になったのか、自分でもよく分からない。

手に取ったことのない、色鮮やかで文字が沢山並んだ、図書館で借りるのは少し違う本。その中で手に取ったのが、少年向けの漫画雑誌だった。

絵のある物を見るのは、小さい頃に読んだ絵本か、挿絵だけ。今まで見た事のあるそれらとは、全く違う世界がそこに広がっていた。

表情が、動きが、モノクロなのに鮮やかだった。今まで見ていた文字だけの世界とは全然違った。不思議と惹きつけられて、店員に注意されるまで私は夢中でそれを読んでいた。

表紙を指先で撫でる。何だか懐かしい感触の様な気がした。週に一度、必ず読んでいたのに。

額に傷痕の様なものがある少年が、背後にいる少女を守る様に刀を構えている表紙だった。何故かその少年に、見覚えがある気がした。

それで気づいた。私は今高校生のはずなのに、この雑誌は少し前のものだ。そうだ、これは、今も続いているある連載の、最初の話が載っていた号だ。

初めてそれを読んだ後、私は母に買い物を強請った。

あの本をもっと読みたかった。時間を潰す為じゃなく、自発的に読みたいと思ったのは初めてだった。

でも、正直にその理由を言ったからだろう。許してもらえなくて、私は少し悲しくなりながら部屋に戻ろうとしたんだ。

「おい」

でも、部屋に入る前に声をかけられた。

隣の部屋から顔だけ覗かせていたその人は、私の兄だった。私よりずっと大人で、勉強ができる人だった。

「こっち来い」

それまであんまり口を利いた事もなかったのに、その人は私を呼んで、手招いた。

恐る恐る、今まで入ったことない部屋へ足を向ける。そこで差し出された物に、驚いた。

「見つからないようにここに読んでけよ」

コンビニで、夢中になって読んだあの本だった。正確には雑誌ということ、その時に兄に教わった。

「お前、こういうの読みたがる位には自分があつたんだな」

遠慮がちにポンポンと、頭に手を乗せてから兄は机に向かった。その後は参考書やノートを開いて、こちらを気にも止めなかった。

まるで一瞬の幻を見たような気になったけれど、手の中には雑誌があつた。私は少し戸惑ったけれど、雑誌を開いてからは夢中で読み耽った。兄から声をかけられるまで、時間が経つのを忘れていた。

「発売日を買って、次の日には古本屋に持って行く。バレたら煩いし。だから、お前が見るのは俺が帰ってきてからお前の寝る時間までだけだからな」

部屋を出る時に兄が言つて、それから兄が家を出るまで、兄の部屋でその雑誌を読んだ。

兄とは殆ど喋らなかつた。ただ、時々新しい話の感想を聞かれたりした。両親に聞かれないように、潜めた声でやり取りした。

時々、兄が少しだけ笑っている様子も見られた。両親といふ時には見られない顔だった。私はそれを見ると、少し胸が温かくなった。

その最後の年、中学三年生の秋頃に、見たのがこの表紙だった。

印象的だった、と言う事じゃない。その時が兄の部屋で、この雑誌を読めた最後だった。

だから覚えていただけだ。この話自体は、私の中では別に特別じゃない、いくつかの話の一つだった。

その週、私のいないところで父と大喧嘩をした兄は、二度と部屋に戻らなかつた。

私ที่บ้านに帰った時には、兄の部屋からは着替えだけが持ち出されていた。訳を聞こうとしたけど、両親はいつも通りで、それを見ただけで私は聞く気をなくしてしまった。

余計な事を聞くと、冷たい目をされるのをわかっていたから。

「この家にいると、息苦しいよ」

いつも通りの食卓、そのただ一つ欠けた席を見ながら、兄がいつか部屋でぼんやりそう言っていたことを思い出した。私は感じた事のないその息苦しさから、遂に兄は抜け出したのだと思った。

兄の部屋で読む漫画の他は両親の言いなりだったその頃の私には、ちつとも分からなかつた。

けれど、兄のいない空っぽの部屋を、席を見ると、胸がしくりと痛んだ。その気持ち

が何なのかも、分からなかった。

顔を上げると、人が疎にしかいなかった。

それに、電車の外がやけに暗い。

どうしてだろう。さつきからアナウンスも、止まる感覚もしないのに、人がどんどん減って行く。

手元に目を向ければ、雑誌だったものが、今度は単行本になっていた。私は買った事がないのに。

赫く、燃え盛る炎を人の姿にしたような人が、こちらを見据えている。

高校に入ってから、交通費と学食代を渡されるようになった。その内の少し節約して、雑誌を買った。

かつての兄のように発売日に買って、次の日に古本屋に持っていく。その日以外は図書館で借りた本を読む。それをずっと続ける。

何故だろう、かつての様な輝きはそこに見出せないのに、縋るように私はそれを続けていた。

誌面の上で人が生まれ、戦い、恋をして、死ぬ。//彼の死もその一つで、私はただ

それを受け流した。

物語の中で時間が流れ、私も時を経ていく。いつの間にか最後にか会った兄の歳に追いつこうとしていて、大学も高校と同じように決めた。

それで、受験勉強をしながら、でも雑誌は欠かさずに読んでいて――。

電車の中に、私が一人で座っている。

膝の上の単行本を開く。パラパラと、文字ではなく絵を追って行く。

“彼”が戦う。

傷ついて行く。

片目を失い、腹に傷を負い。

それでも責務を果たす為と、赫い刃を振るう。

その刃が、目的を果たせぬままに、折れる。

満身創痕の“彼”が、満足そうに笑んだ時。

視界に緋色がはためいた気がして、身を起こしたら、ガラスに人影が映っていた。

表紙の人に、よく似ていた。

けれど、その眉は力なく下がっている。

顔の作りはあまり変わらないのに、ひどく気弱そうだ。

ただただ、ひたすら悲しそうに、こちらをずっと見つめている。

その姿を、ああ、私はよく知っている。

秋のある日、私は死んだ。

ありふれた事故だった。

生まれ直した私は知った。

私がずっと分らないでいた気持ち。

兄がいなくなつて、胸の中に穴が空いたようだった。

ううん、本当はもつと前から、私の中は空っぽだった。

それを埋める物を、教えてくれるかも知れなかった兄が居なくなつて、余計に穴が広がつて。

それでも知りたくて、兄との唯一のつながりだったものを手放すまいと握り締めて。

結局分らないまま、終わってしまった。

生まれ直して、母に抱かれ、父に撫でられ。

そうして、初めて知った。

ずっと、ずっと——自分が、寂しかつたのだと言うことを。

「幸せだと思つてたのにね」

窓ガラスに映つた人は何も言わない。悲しそうに、ずっと私を見つめている。

声にしたつて、聞こえない。聞いているのは自分だけだ。わかつていて、わざと言葉にする。

「私より幸せだつて思つてたのに。父も母も、いつも真つ直ぐに見つめて、愛してくれた。弟だつて慕つてくれる。幸せだつたのにね」

無限列車にいる鬼は、人の望む夢を見せると言う。

私の安らぎは確かにこの電車に乗っている時だった。駅で雑誌を買つて、電車にいる時は母が急に部屋に来る事を気にせず自由に読めた。

発売日は私の他にも読んでいる人がいて、兄といた時ほどでは無いが、少し温かくなれた。

両親に唯々諾々と従っていた私の、唯一の自由な場所だった。

そして、襲い来るかもしれない運命が、他人事でしかなかった頃だ。

「温かい家族も、父も母も、弟も居ないのに。いつも独りぼつちで、自分で何も選ばず、誇りも矜持も、夢も希望も何にも無く、漫然と過ごしていただけの日々でも……」

鬼が居ないここでは、運命に怯えなくて済むものね」

愚かな人。馬鹿な人。

ここまで自分で足を運んだのに、こんな現実逃避をする程、恐ろしいんだね。

ああ、本当に、なんて弱い。

強くなろうとしてきた。

強く在ろうとしてきた。

それでもまだ、訪れようとしている事が恐ろしい。

以前よりも、ずっと多くを手にしてしまったから。

それを喪うのが、怖くて仕方ないんだ。

そして悲しくて仕方ない。

こんなに恐ろしいのなら知らなければよかった。

そう思ってしまった自分が、それを少しでも幸せと想ってしまった自分が、悲しいんだ。

「でも、そんな弱い人間が、僕だ」

立ち上がる。

羽織が揺れる。

視界に映る髪が黄金と赫に染まる。

手足が伸びて、身体がグンと大きくなる。

ブレザーは男の学生服にも似た隊服に。

携えていた単行本は消え、腰に重く刀が下がった。

窓ガラスに映る僕は、“彼”によく似ている。

でも、あんな風には笑えない。

それでいいんだ。

ここにいるのは“彼”ではなく、僕だから。

これは僕の人生だから。

こんな僕の弱さも焼べて進もう。

まだ、やらなきやいけない事がある。

柄に手をかけ、刀を抜く。

夢の中なのに刃の色はいつも通りで、苦く笑った。

こんなところばかり現実に沿わなくてもいいのに。

「さて、——帰ろう」

刃を首に添え、目を閉じる。

そして、やるべき事をする為に、手を引いた。

竈門兄妹と 煉獄さん

「あつ！煉獄さん！」

目を開けるとすぐ目の前に竈門君が居たのでちよつと驚いた。君時々距離感おかしいね？

「おはよう。どこまで把握してる？」

「俺も今起きました！切符が血鬼術だったみたいです！縄も変な感じがするので多分……」

視界の端で急に動きがあったので、咄嗟に相手の手元を跳ね上げる。悲鳴を上げた少女の手から錐のような物が飛んだ。

そのまま手を捻り上げて、座席に押し付け拘束する。その時少女の腕と自分の腕が縄で括られていた事に気付いた。なる程、僕の担当はこの子だった訳だ。

「あああッ!!」

「煉獄さん!?その人は……」

「竈門君、覚えておきなさい。世の中には自分で進んで鬼に協力する人間もいるんだよ」

「え……!?!」

「そうだね？君は多分、夢を見ている間の僕を殺す予定だったんだろう」

鋭い声を出すと、少女は座席に押しつけられた状態のまま、苛烈な目でこちらを睨んだ。

「何よ……！変な夢見て挺摺らせて！邪魔しないでよ！夢を見せてもらえないじゃない！！」

「成る程、ここの鬼は夢を見せる能力を持つんだね。切符を切る事で発動するということころかな。この縄は夢と夢を繋げて干渉させるためのものか。身体ではなく、夢を見せ無防備になった精神の方を殺すように手配されていた。その為の駒に、そうだな、幸福な夢でも餌にして君達を釣ったのかい？」

「うるさいッ痛い痛い！わああああ！！」

無理に暴れようとするので、頸動脈を少し押さえて意識を落とす。我妻君達の方に目を向けたが、かなり少女が大声を出したのに起きる様子はなく、彼等も少年少女と縄で繋がれている。

はたと、椅子の影に見覚えのある子がいることに気付いた。竹の口枷に麻の葉模様の着物、毛先が緋い長い髪。寵門君の妹の鬼の子だ。

「君を起こしたのは妹さん？」

「……切っ掛けになったのは禰豆子の火です。夢の中で禰豆子の火で身体が燃えて、か

なり覚醒に近づきました」

困惑したように気を失った少女を見ながらも、しつかり報告する竈門君。彼の手首の縄は焦げて燃え落ちていく。

なるほど、血鬼術に対抗するにも血鬼術という事かな。身体が燃えたと言っていたが実際燃えているのは縄だけだ。鬼に関する物だけを焼くのか？

「縄も血鬼術の可能性があると云ったね。じゃあ妹さんにこれと、我妻君達の物も焼いてももらえる？」

「はい！ 彌豆子、頼む！」

「ムーッ！」

元気よく声を上げた鬼の子の掌から、血の炎が生まれ出る。鮮やかに躍る火は、縄を伝って肌に触れても少しも熱くない。人には危害を加えない術のようだ。竈門君の指示にも問題なく従っている。

問題は、竈門君の目と指示のない状況でどう動くかだな。箱から出ればずっと一緒に行動しているのは無理だろう。戦力として使うなら分散できなければ意味がない。

何にせよ、先に敵意がある存在の鎮圧だ。

「竈門君、我妻君達と繋がっていた民間人を制圧できるね？」

「制圧……！」

「敵意がある者をそのままにしておく、任務の障害以前に他の乗客、何より彼等自身が危ない。迅速に意識を失わせ武器を回収、鬼の搜索に向かう。気をつけなさい、追い詰められた人の力は凄まじい」

「……はい！」

起き上がり錐を構える二人に竈門君が対峙するのを見ながら、意識を先程まで掛けていた椅子の裏側に向ける。そこからふらつきながら姿を見せた青年には、敵意がない。「君も錐を持っているね。こちらへ渡して」

「……はい……」

涙を流しながら差し出された錐を受け取る。金属ではないな。これも血鬼術の一部か。再び持つて襲ってきたり他の乗客に危害を加えないよう、竈門君が回収した物、そして倒れていた車掌の懐から出てきた物と合わせて窓から破棄しておく。

自然にはよくないけど、今から戦う鬼に関わるものを持つていて悪影響があつては困る。致し方ない。良い子は真似しないでね。

失神した子達を椅子に座らせてから、連結部へ急ぐ。戸を開くと風圧で一気に外気が押し寄せてきた。隣の竈門君が顔を擧めて鼻を押える。

「ぐっ……い！」

「竈門君？」

「鬼の……匂いです！凄く重い……強い鬼だ」

鬼にも匂いを感じるのか、この子は。対峙すれば鬼の気配を感じる事も出来るけど、それは近づいてから始めてわかることだ。過去巧妙に人間に擬態されて、気がつかず食われてしまった隊士もいる。それをあろうことか匂いで判断するとは！

そういえば嘴平君の型にも周囲の地形や鬼を知覚するものがあつた。宇髄さんと一緒に戦った時、鬼や民間人を音で察知している様子を実際見聞きしたことがある。感覚の鋭い子はそれぞれに、そう言った特技を持っているのかもしれない。

少し考えて、指示を出す。

「他の車両にも協力者が居るかもしれない。乗客に危害を加える恐れもあるから僕が対処しよう。妹さんには我妻君達を起こすように指示をして。竈門君、君は車両の上から匂いを追って鬼を探すんだ。見つけ次第斬るように」

「俺がですか!?!でも、煉獄さんの方が早く鬼を斬れるんじゃない?」

「この任務は試験でもある。君と、妹さんのね」

息を呑んだ竈門君を見据える。彼の背に、キョトンとした顔の鬼の子が寄り添っていた。意識して真顔を作る。冷たく見えるようにする。

「君が本当に鬼を連れて戦えるだけの實力があるか、妹さんが本当に人間に危害を加えず戦えるのか。多くの柱が疑念を持っている。一部を除いては全く信用していない。

僕もそうだ。厳しい事を言うけど、君の才能は評価しているが、まだ全て信じるに足るとは思っていない。判断材料が十分じゃないからね。だからこうして見定める機会を作ったんだ」

「……はー」

ああ、傷付いた顔をさせてしまった。ごめんね、竈門君。でも、これは僕の役割なんだ。

きっと他の柱は積極的に君を見定めようとはしない。興味が無いんだ。関わりなくともその内死ぬと思っている。伊黒さんや不死川さんはいつそ死ぬと思ってるかもしれない。あの人達は十分過激だし、後見の富岡さんのことも嫌いだから。

でも皆がそうじゃなくても君を信用しようとしてるみたいだ。宇髄さんは僕から君達の情報を得ようとした。君達を信じようとしてくれる人は、ちゃんと居るんだ。

だから僕もきちんと見極めたい。情に流されずに、柱として。そして出来れば、それを他の柱に伝えて、少しでも君達を見て貰う助けにしたい。

僕は、竈門君。君が戦える事を信じたい。君達兄妹を信じたいと思ってるんだよ。「実力を示し、自分の力で信頼を勝ち得なさい。いいね？」

「……はい!!頑張ります!!」

「いい返事」

少し緩んでしまった口元を引き締め、懸垂で屋根に上がる竈門君を横目に指笛を吹く。客車の外殻に潜んでいた鴉が、合図に従って現れ肩に留まった。

「他の子の鴉を一羽飛ばして鬼の出現を報告して。術の巧妙さと規模から十二鬼月である事も考えられる。民間人及び乗務員にも協力者がいた為、討伐後列車が運行停止する可能性有り。隠の派遣準備を。討伐後改めて報告、要請する」

「了解」

「竈門君の鴉は竈門君につけて。危険なら僕を呼ぶ事。他はいつも通りに。よろしくね」

撫でてやると鴉らしい鳴き声の一つ残し、飛び立つ。その姿が消えてから振り向いて、少し驚いた。

「寄り添うような至近距離で、鬼の子がジイツと僕を見上げていたのだ。」

「ど、うしたの?」

まん丸の綺麗な目。まるで幼い子供みたいだ。口枷が無ければただの可愛らしい女の子にしか見えないかもしれない。

竈門君の指示が通りにくかったんだろうか。戸惑っていると、鬼の子の視線が移る。

その先にあるのは、僕の手だ。

手がどうかしたんだろうか。何かついてる？見ようと手を挙げると、あからさまに目が輝く。下ろそうとすればシユンとするように眉尻が下がった。

よく分からないけど……撫でられたい、とか？

「えつと……。君も、頑張ろうね？」

これで大丈夫なのか、と思いつつもそつと手を伸ばし、触れる。遠慮がちに撫でると、目元が笑った。

「ムーン！」

頑張る！と言わんばかりに拳を掲げて駆けていく。殴って起こすつもりなの？出来ればやめてあげて？

少し唾然と見送ってから、今まで触れていた掌を見る。……普通の人の子と、変わらない感触だった。撫でられると嬉しいのか。本物かは兎も角、人の心のようなものが、あの子にはあるんだな。

うん。なんか少し、元気出了。

さあ、僕もやる事をやろう。

列車の鬼と 煉獄さん

眠っていた乗務員は数人いたが、懐に錐を持っていたのは一人だけだった。念の為に拘束しておきたい所だけど、鬼との戦闘で列車に影響があつた時、その状態だと大惨事になりかねない。妥協して軽く頸動脈を押さえ意識が中々戻らないようにしておいた。勿論一番悪いのは鬼だが、他の犠牲を厭わなかつた彼らにも罪はある。公に裁かれる事はないが、彼らには償いの気持ちを持って生きてほしいと思う。

先頭の機関車には客車から渡る事はできない。一旦外に出て竈門君の様子を見ておくかと考えた時、車内の様子が一変した。

「!? 血鬼術か……!」

壁や椅子、天井の一部が盛り上がり、ずるりと人の身体を這おうとする。血管の浮き出た醜悪な肉塊が次から次に現れる。今にも人を呑み込もうとするそれらに、刀を抜いて一閃。

切り落としたものは鬼の一部のように崩れさる。そして徐々に再生していく。幻の類ではない。

成る程、態々列車に呼び込むような手の込んだ事したのは、己が同化して一気に

人々を吸収する為なのか。そしてこれは、実質僕達への人質だな。

肉塊の動きこそ大した事はないが回復と増殖は早い。それが八両分に及ぶ。

守らなければならぬ乗客は二百余名。

此方は階級の低い隊士三人と僕一人、戦力としては数えられるかわからない鬼が一人。

人を守れば頸を探せず、頸を探せば人を喪う。小狡い鬼らしい、有効策だ。

普通に考えれば、犠牲なく切り抜けるのは不可能と言える。

でも、「彼」はそれを成し遂げた。

ならば僕が出来なくてどうする？

斜め下段に刀を構え、半身引いて意識を集中する。

例え才能がなくても、やり遂げて見せよう。

その為に重ねてきた努力なんだから。

「鬼殺隊を甘く見るなよ」

出し惜しみなんて、してやるものか。

炎の呼吸の型は火力が高い攻撃が持ち味だ。身体能力を著しく上げての、強靱な一撃。

だからこそ、密閉空間で使うのには向かない。特に今のような列車内では使えないと言っている。

大正の客車は大部分が未だ木製。呼吸を操る剣士が一撃入れれば直ぐに砕ける。穴が開けばそこから乗客が落ちかねない。列車はまだ走行しているのだ。落ちれば剣士ならともかく一般人は死ぬ。

つまり車両の破壊は決してしてはならないのと同義。炎の呼吸は型のほとんどを封じられる。

ただの剣戟で行うにも繊細な操作がいる。車両はもちろん乗客にも当ててはならず、確実に肉のみを削がねばならない。

加えてそれに速さも必要となる。肉が人を呑むより速くそれを断ち、回復より先に他の対応をする。

またそれらを肉塊に侵されていない足場を選んで実行しなければならない為、動きに柔軟さも要求される。

繊細、かつ速く、柔軟に。

選ぶことができるなら、恐らく現状に合うのは水の呼吸。変幻自在な歩法、流れる水のような剣戟は屋内戦向きだ。

—— 炎の呼吸

無論僕に適性は殆ど無く、型を満足に使う事はできない。知識は持っていて、基準に満ちる精度には及ばない。

“煉織”
れんしき

——だから、合あわわせせてて煉れんりり上上げげる。

火流
ひなぐ

炎の苛烈さを残し、水が流れゆく様に。

舞う様に足を運びながらも確実に断ち斬っていく。

独自の呼吸というほどでは無い。他の流派の基礎を踏まえ、傾向を取り入れただけの技術に過ぎない。

それでもこれは、僕の歴とした研究成果だ。

同じ呼吸からの派生であるという事は、真逆の性質を持つとしても別れた場所は同じなのだ。ならば複数の呼吸を使い、鍛えていけば頂点たる呼吸の強さに近づくのでは無いか。

柱でなかつた頃、そう浅はかに考えて試行錯誤した時期があつた。

様々な育手の元を巡り、一定期間近隣の任務をこなしながら師事して呼吸の基礎を実際に学ぶ。そして、それを炎の呼吸と合わせて用いようとした。

結論として、無理だつた。肺を壊しかけた。ただでさえ人間の身体に無茶を強いる全集中の呼吸を、複数使うと言うのは不可能だと身を以て知つた。

肺を鍛える鍛錬にはなるだろうが、とても戦いの場で使う事はできない。一瞬息が止まっていたと当時世話になっていた育手にも言われた。戦うたびに息が止まっていたら命がいくつあつても足りない。そもそも基準値に至っていない呼吸を幾つも使つたところで意味がないので、この道は止む無く断念した。自分でも死ぬかと思うくらい苦しかったし。

その代わり、呼吸そのものではなく、傾向を僕の基盤である炎の呼吸の一部として取り入れたのだ。

呼吸によつて得られる力を操作し、それぞれの独特の動きを取り入れる。上手く切り替え、使いやすくする為に型を作つた。

炎の呼吸の型と共に日々稽古して身体に覚え込ませる。呼吸法も炎の呼吸を基盤とし折り混ぜる形でなら取り入れる事ができた為、炎の呼吸本来の型とは違う物でもより動きやすくなった。

そうした編纂と鍛錬の末に生まれたのが、「煉織」と称する型。研究という名の無茶を根底にした、現状僕のみが使う技術だ。

炎の呼吸のみに専念せず、こうした技術を使うのも僕が半端者と誹られる要因だが、才能のない僕が柱を務める為の苦肉の策である。

まあ勿論、手数を増やせばいいわけでもないんだけどさ。増やせばそれだけ鍛錬が必要になるから、使い物になるのはほんの幾つかしかない。

火流は炎の型が使えない局面での汎用性が高いので、必然的に精度が高い。あつという間にこの車両は何とかなった。細か目に刻んで置いたから少しは持つだろう。

さて、残り七両に鬼を斬り損ねた竈門君と、起きてるかわからない嘴平君に我妻君、不確定要素の鬼の子か。凄く頑張れば全車両見れなくはないけど、ここは鬼の子の行動と能力を見ておきたい。

僕が乗客が多い後方車両を担当、彼らに前方車両の護衛と鬼の頸を探す役を分担させるか。頸斬りに竈門君、護衛に鬼の子を当て、鬼の子側にもう一人と頸斬りにもう一人。

嘴平君に護衛を当てるとゴネそうだし、屋内戦闘にはどちらかといえば我妻君が向いているだろう。雷の呼吸なら速さは折り紙付きだ。

彼らの監察をしながら後半四両……五両にしておくか、まだ癸なんだし。五両守るのは中々大変だろうが、これも僕の役目だ。しっかりやろう。

よし、まずは道中肉塊を斬りながら合流と指示出した。

床をしつかり踏みしめながら体勢を低くする。前のめりに、刀を中段に引き絞る。

炎の呼吸 “煉織”

求めるのは雷の如き速さと、飛び散る火花のような斬撃だ。

灼光^{やこう}

力一杯踏み込み、一変する視界に合わせて刃を振るう。鋒のブレは許されないし許さない。速さに判断がついていける様に手足だけでなく脳にも力を傾ける。

方向転換に座席や壁、時に天井を蹴りながら技を維持して進む。

結構な揺れと音がするはずだが、誰も目覚めない。老若男女、鬼の魅せる夢に微睡ん

でいる。その眠りをこれ以上踏みにじらせない為に、駆けた。